

2010年

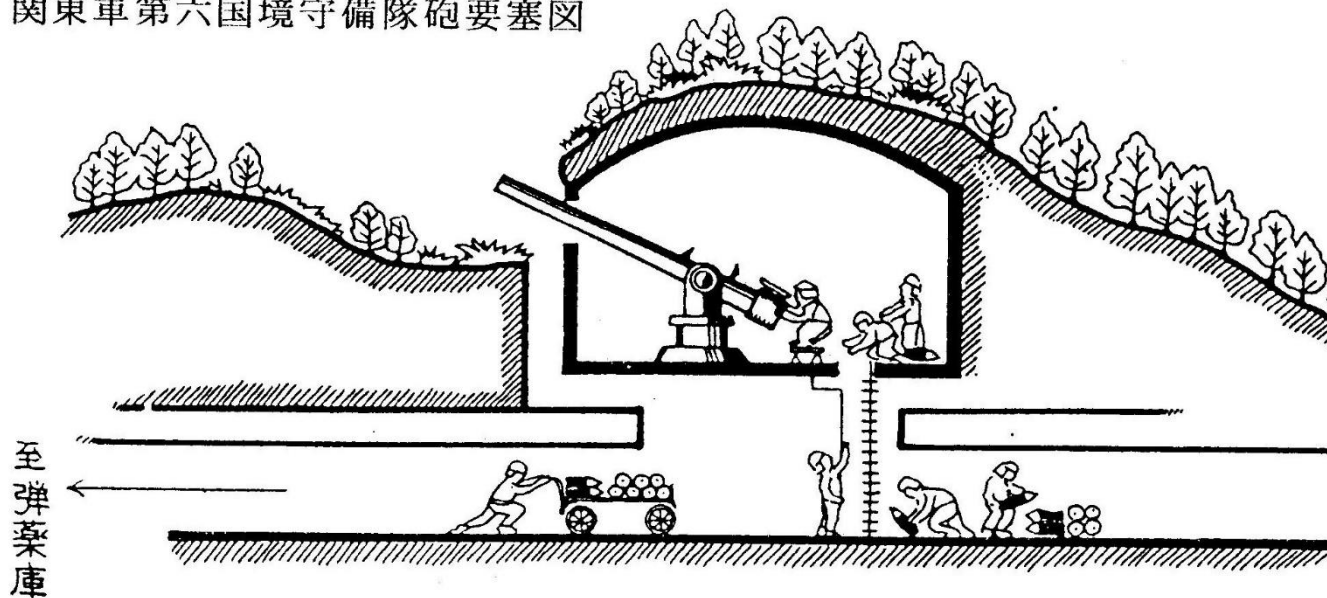
第22回

戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集＜17集＞

私は（木匠ムージヤン）として10名前後の苦力（肉体労働者）を使いました。この苦力は、山東省侵攻中の日本軍が、農作業の農民を兎狩でもするように、一網打拉致し満国境の陣地構築に送り込みました。一日の作業が終わると二粒の阿片を渡すのです。喜びましたね。阿片中毒にして、阿片を貰える喜びで働かせ、完成すると機密保持で全員殺しました。

30頁 流転の万年一等兵より

関東軍第六国境守備隊砲要塞図



画 砲兵大隊長
清水 保

十 榴 砲 塔

ところ 緑生涯学習センター
月・日 平成22年7月24日
戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

発刊の言葉

戦後65年の節目の年、第22回戦争体験を語り
 継ぐ集いの開催にあたり、戦時体験記録集第17集
 を発刊することができました。ご投稿いただきまし
 た皆様に厚くお礼を申し上げます。

第16集より「語り部」の皆様にお話しいただい
 た要約を掲載しております。

平和維持のためこの小冊子が少しでもお役に立て
 ばと念じております。

目次

レジュメ	今につづく	語り部	伊藤	万平	一頁
レジュメ	戦犯家族の悲しみ	語り部	伊藤	万平	一頁
レジュメ	愛国少年	語り部	伊藤	芳雄	二頁
レジュメ	陸軍に志願しました	語り部	伊藤	芳雄	二頁
レジュメ	学徒動員	語り部	伊藤	芳雄	二頁
レジュメ	履く靴も下駄もなく	語り部	伊東千賀子		三頁
レジュメ	鳴海の空襲	語り部	大村	達雄	四頁
レジュメ	学童疎開	語り部	大村	達雄	四頁
レジュメ	空襲・地震の恐怖	語り部	澤山	昭八	五頁
レジュメ	戦争を知らなくても	語り部	佐藤	幸子	六頁
私の戦記	撃沈から投降まで	語り部	上野	三郎	七頁
特別投稿	忘れることの出来ないあの日	語り部	広田	和子	一〇頁
ヒロシマ	そして舞鶴	語り部	橋詰	四郎	一二頁
死体は谷底へ		語り部	市田	高支	一五頁
魚が屍体を		語り部	高森	香	一五頁
死を呼び込む埧埧に生きて		語り部	伊藤	善吉	一九頁
従軍看護婦回想録		語り部	小宮山	里野	二三頁
語り継いでほしい満州棄民		語り部	綱本タヨネ		二七頁
流転の万年一等兵		語り部	長尾	堅造	三〇頁
十七歳の志願兵		語り部	佐藤	義夫	三三頁
戦争を知らなくても		語り部	佐藤	幸子	三四頁
学徒動員中の戦争体験		語り部	大村	達雄	三五頁
神風は吹かなかった		語り部	伊藤	万平	三七頁
何が玉碎に追いやったか		語り部	伊藤	万平	三八頁
引揚の史実を語る舞鶴平棧橋		語り部	橋詰	四郎	三九頁

今につづく戦犯家族の悲しみ

語り部 伊藤 万平

無情

戦争も勝てば善者、敗れば悪者と云われ
世の中の仕組みに巻き込まれて
国の為に生死の懸けて盡し揚句に
戦争犯罪者として異国の地に消え
靖国に森にも正規に祀られず
将兵の無念さは計り知れない
その思いを切実な詩に残し
それも絞首刑か銃殺刑で刑場の露と消え
断腸の思いを辞世に残し殉忠の諸士の歌

牢獄を清く過ごさん明け暮れを心の糧に歌を詠みつつ

雁が音に伝える今の報せをば家なる人は何と聞くらん

何故にかくも苦しき運命とぞつぶやく戦友のいたし細りぬ

一碗の粥に生命をゆだねつつ日本男児の爲す術もなきか

生まれ来て斃れて生まれ次の世の命に生きて散りぬく我は

鉄窓に身を一人はろけくも故郷を想う星清き夜

夢多き我が半生の来し方をぼんやりと想うねむられぬ夜は

君知るや南の国の牢屋に我が俘虜の身に耐えつ送る日

久方に守宮啼く声聞きし夜は遠く偲ばる高砂の友

愛国少年陸軍に志願しました

語り部 伊藤 芳雄

私は、1944（昭和19）年。19歳で陸軍の一軍人として、名古屋中部第8部隊に入隊しました。生涯忘れることの出来ない思い出話を語ります。

その年の3月2日、急遽出動命令が下り、名古屋駅前に集結が決まり、早朝現地出発。私は幸にも家族全員見送りに来ていました。これが最後の別れかと思い、胸が一パイになりました。母が急いでそばに来て私に一言「お国の為に頑張って来なさい。」と、そして小さな袋を渡してくれました。私はなにげなく雑嚢（ざつのう）に納め、軍用列車に乗込みました。

行き先は不明で、約一週間、船と列車で着いた所が（中国南京市郊外）の立派な兵舎でした。入隊一週間後のことです。就寝前に母に貰った小袋を開け調べたところ、中から小さな缶と印鑑が、他は何もありません。缶の中身を見てビックリ昔の百草薬が小さく小麦粉で丸めて一パイ入っていました。

これこそ優しい母の愛情ですね。外地では気候と水、食が変わることに気遣ったのだと思いました。私は床の中で大泣きし、今日迄なんの親孝行せず、不孝と心配をかけてばかりでした。その事が残念でした。私達新兵はほとんど体調をこわし特に下痢患者続出です。私は幸い母の愛の薬で健康で元気した。

この母の思い出は今でも忘れることはできません。どんな家庭でも親は陰日向なく子を支え見守ってます。皆さん光の親を大切に孝行しましょう。

いつまでもあると思うな親と金。

学徒動員 履く靴も下駄なく

語り部 伊東千賀子

①学徒動員（学校には配属将校が配置されていたか）
県立伊丹高等女学校在学中、1年から4年までは勉学一筋でした。が戦局が不利になり、1944（昭和19）年4月に5年生に進級したのに学校へ行かず、自宅から阪急電車塚口駅から2区目の西宮の軍需工場で軍用機の計器組立作業に従事。操縦席の前に取付けてある計器の種類と役目など。性能はアメリカより下かも

②空襲

1945（昭和20）年3月13日大阪初空襲され、空襲を知らせるサイレンを合図に工場外に造られた防空壕へ逃げ込んだ。

③日本の力が弱くなっていくのが判りましたが一所懸命働いた。

高い空から工場を狙う空襲から、焼夷弾で夜住宅地を焼き尽くす空襲に変わり、夜は怖くて眠れなかった。日本の近くまで航空母艦が来て艦載機が操縦している顔が判る低さで逃げる人を機銃掃射。

④空襲になると学徒は帰宅。

空襲になると学生は防空壕に逃げ込まず帰宅させた。が。交通もストップなので、一番近道の線路を家に向かって走って逃げた。人々は防空壕へ逃げ込み、地上は私だけなので艦載機に見つかると撃たれる怖さがあった。阪急電車の武庫川鉄橋の枕木を裸足で跨いでいると川の流れが見え、足がすくむ怖さだった。

⑤食料も日用品も統制配給制に 履物も生理用品にも困った。

物資が更に少なくなり「闇」が横行し権力のある人が有利に、新語「竹の子生活」竹は大きく成る時、身に付けている皮を脱ぐので、都会の人は着物などで農家の人と食物と交換した。が。権力のある警察官が身体検査して食物を持っていると統制品だと難癖を付け取上げられた。

⑥生活燃料はガスや電熱器は少なく、薪木炭で統制配給で足りない

ので山へ行って枯れ枝や松かさなどを拾いに行った。

⑦1945（昭和20）年3月卒業式もなく卒業。

⑧卒業式もしていない私から、戦争を知らない人に伝えたいこと。

鳴海の空襲

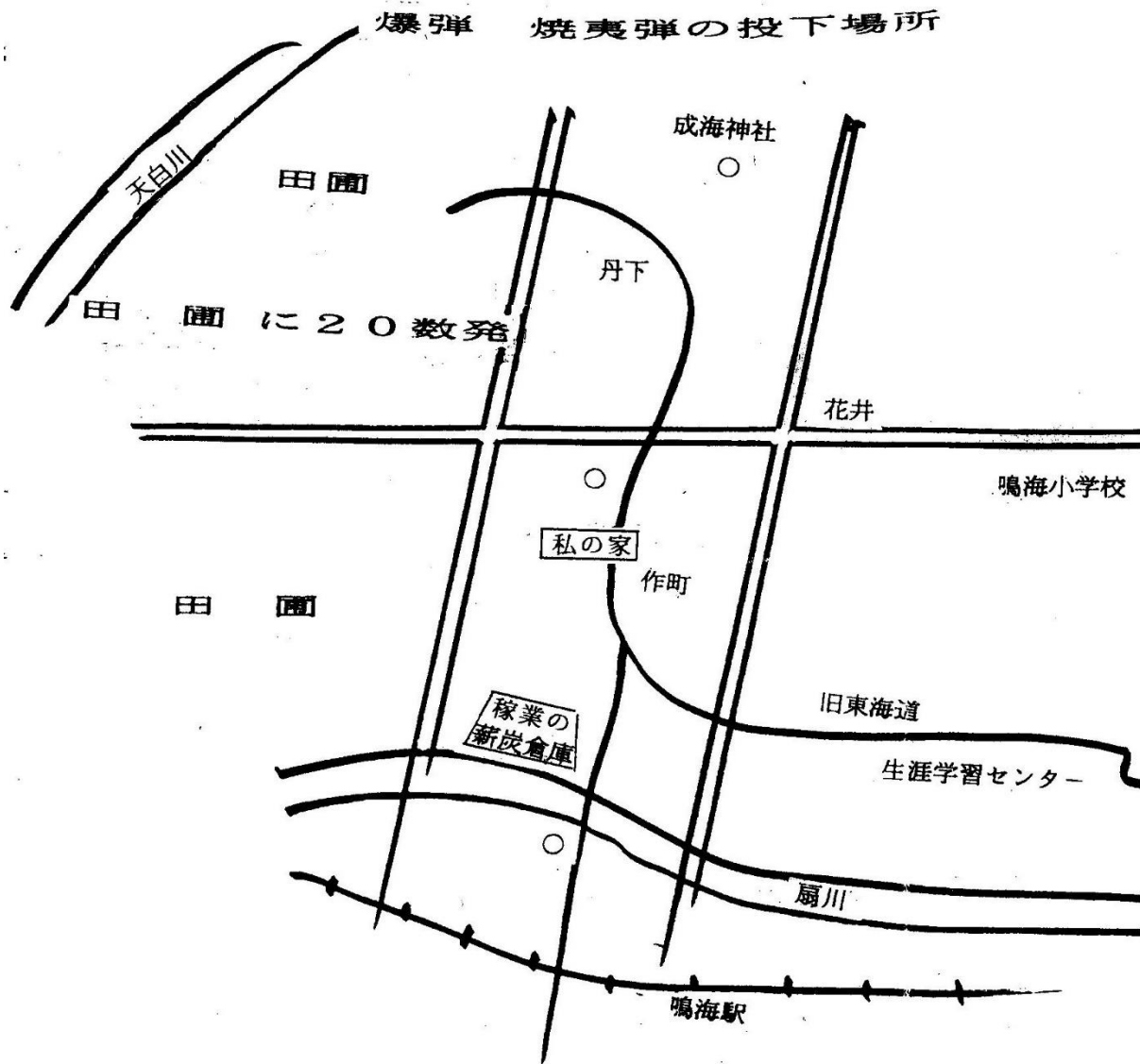
語り部 大村 達雄

当時鳴海は、愛知県愛知郡鳴海町で、東海道五十三次宿場の品川から四十番目で私は鳴海町作町で生まれました。

鳴海の空襲は1944（昭和19）年12月、B29から20数発落とされ、東海道の町並みにも3発落とされ20数名の犠牲者が出ました。

その後、天気の良い日は必ず空襲警報が出るようになり、天白川河口付近の千鳥橋まで走って避難しました。12月17日の空襲は家の近くに落とされ、家が危ないと思い天白川の堤防を走って家に向かいました。

途中タンポには落ちた爆弾で、直径10メートル程の大きな穴があちらこちらに出来ているのを見ながら、怖々走りました。家に近付くと町中が騒然としており、私の家の井戸端には男の人が、爆弾で飛ばされた大きな石の下敷きにされ死んでいました。



深夜から夜明けまで
父の誘導で火の海を逃れて

語り部 澤山 昭八

文中解説

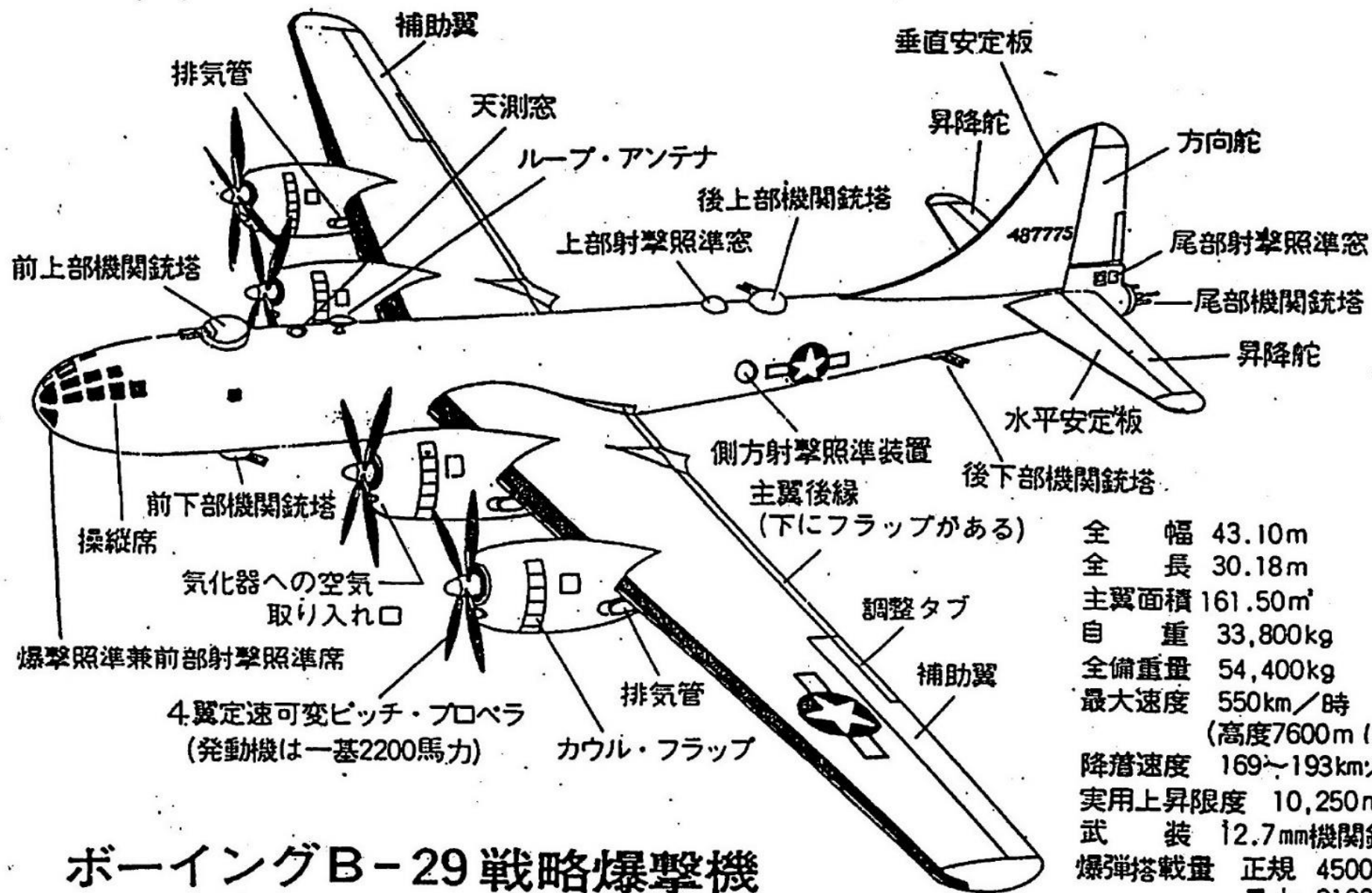
高辻小 高辻尋常高等小学校 私の母校 小学6年生と高等科2年迄
馬車屋 牛馬に車を挽かせ荷物を運んだ運送業者（トラックは軍に徴発）

港区の工場で造った軍用機の胴体翼を、前後を憲兵が護衛した牛馬で小牧や各務原飛行場へ運び組み立てていた。

乳牛の牧場 牧場は毎朝新鮮な牛乳を配達していた牧歌的地域だった。
強制家屋疎開 居住している地域住民と相談せず一方的に付近一帯を空き地にし空襲から守ると家屋を強制取り壊し広場にした。

左岸・右岸 川下に向かって立ち左側が左岸・右側が右岸。





全 幅 43.10m
 全 長 30.18m
 主翼面積 161.50m²
 自 重 33,800kg
 全備重量 54,400kg
 最大速度 550km/時
 (高度7600mにて)
 降着速度 169~193km/時
 実用上昇限度 10,250m
 武 装 12.7mm機関銃×10
 爆弾搭載量 正規 4500kg
 最大 9100kg
 乗 員 10~14名

ボーイングB-29 戦略爆撃機

MEMO

子童疎開
空襲・地震の恐怖

語り部
澤山 昭八

戦争を知らなくても

語り部 佐藤 幸子

① 戦争を知らない私

② 両親の戦争体験談をつなぎ合わせて

③ アジア・太平洋戦争が私の心の中で

④ 立命館国際平和ミュージアム
ボランテティアガイド養成講座受講

⑤ おばあさんとお孫さん

⑥ 戦争被害は数字で理解できない

⑦ 「ムッチャんの平和像」

⑧ 言い伝えたいこと

戦争の悲惨 語り継ぐ

戦争を経験した70人以上の人たちが集まり、講演や手記で体験を次世代へ引き継ぐ活動を始める。「戦争と平和の資料館ピースあいち」(名古屋市長東区)が募集した「語り部」に応募した人たちが、体験者を動かしたのは、「戦争の記憶が薄れている」との危機感だった。

(相原亮)

現地住民投石 ■ 病院船、血の海

ピースあいちが6月に募集を始めたところ、申し込みが相次いだ。7月末、約50人で「ピースあいち語り手の会」が発足。9月末には74人に達した。

空襲や疎開、被爆など体験は様々な。

最高齢の会員、上野三郎さん(95)「名古屋市長天白区」は、日中戦争、太平洋戦争と2回召集を受けた。44年7月、輸送船でフィリピンに向かう途中に米軍の攻撃を受けて船が沈没。奇跡的に命は助かった。

その後、フィリピン・ミンダナオ島で陣地をつくって米軍の攻撃を待ったが、艦砲射撃の前になす



約15年前に描いた当時のスケッチを手に振り返る上野三郎さん「名古屋市長天白区」

ピースあいち 募集に70人超

すべもなく、四散してジャングルに逃げ込んだ。終戦を知らず、米軍がまいたビラを読んで投降。収容所へ移動する際、現地住民がのしりながら石を投げつけてきた光景が、記憶に残っているという。

上野さんは、「本当によく助かった。不思議でならない」と振り返る。最近まで戦争体験を話すのに抵抗があったが、参加を決めた。「もう、このような体験は繰り返してほしくない」と話す。

愛知県豊橋市出身の杉本初枝さん(85)「同県東郷町」は、神奈川県横須賀市にあった海軍病院の外科病棟に配属された。あこがれの白衣を国防色のカーキ色に染めて、看護に当たった。岸壁に病院船が着岸すると、縄ばしごを上ったら、甲板は血の海だった。

脳裏には、歯を食いしばって痛みに耐えながら力尽きた兵士の姿が、今も焼き付いている。

杉本さんは「平和ってありがたいと思う。二度と戦争をやってほしくないのです」。

野間美喜子館長は「『体験を残したい』という強い思いを感じた」と話す。

今後、「語り手の会」は体験内容を整理した上で、小中学校などの要請に応じて語り手を派遣する。また、体験者に手記を書いてもらったり、語る様子を録画したりして後世に残す予定だ。

私の戦記―撃沈から投降降まで

上野 三郎

昭和19年6月、私は二度目の応召で入隊し、8月4日、下関、門司両港から一万トン級輸送船30隻、護衛駆潜艇6隻、護衛航空母艦1隻という大輸送船団で、フィリピンで最後の決戦を展開する作戦部隊の一兵士として扶桑丸に乗船していた。台湾が近づくとアメリカ潜水艦への警戒と監視を厳しくしつつ高雄に寄港、高雄を出て10日程たった日の明け方、高音の警報と同時に物凄い轟音と衝撃を体に受けた。アメリカ潜水艦の魚雷が船腹に命中したのだ。

船艙内は蒸し暑くて眠れず、横着な私は甲板に吊り下げられているボートの下が夜露も避けられるのでそこで眠っていた。一瞬で目の前は火の海となり、私にボートが被さり身動きが取れなくなった。火が迫り熱くてたまらない。何とかしなくてはと、もがいても動けない。もうこれまでと思ったら、家族の顔が走馬灯のように浮かんでくる。ところが4・5分も経ったか沈没する船の傾きで突然抜けることができる。急いで抜き出て甲板の下を見ると、既に大勢がボートに乗り移って、『鉈はないか』と叫んでいる。私は夢中でそのボートに飛び下りた。ボートは沈没中の本船とロープで繋がれているのだ。

『鉈』がないと判ると、皆次々とボートから海へ飛び込んでいく。私は救命胴衣を付けていないので飛び込むこともできず、一人ボートに取り残された。――もう本船と一緒に沈むしかないと観念――ただ合掌して祈るのみであった。これも数分の事で、今度は大きく傾いた巨大な煙突が頭上に横倒しで迫ってくる。煙突の下敷きになるまいと方向を見極めて逃げたが、ボートは逆立ちになって沈んでいく。船が沈む時は渦が発生し、浮遊している物は人を含め巻き込むのだ。ああボートと心中と――。一瞬上を見ると、倒れる煙突の向側にあったボートがロープで繋がれたまま上から落ちてくる。私は咄嗟にそのボートのロープを掴んでいた。なんとこのボートと本船と繋いでいるロープは衝撃で切れたのだった。ボートは奇跡のようにお腕を伏せたようにブカリと浮いたのだ。

私は海水を飲むこともなく、顔を海面から出しボートに掴まって漂よっていた。その内、救命胴衣を付けて泳いでいた者達が集まってきた。数時間後には14・5名になった。大波が来る毎にボートが転覆、その都度救命胴衣で漂っていた者は海水を飲んでいたので体力も低下していて、溺れる者が増え最後は7・8名になった。沈

められてから数時間後、駆潜艇が戻ってきて救助を始めた。私にも一本のロープが投げられ、ああこれで助かったと思った。この後はマニラ上陸までの記憶は全くない。撃沈された船の将兵は武器兵器も海中へ喪失し、着の身着のまま裸同然で上陸したのだ。上陸後聞いた話では、沈められたのは扶桑丸を含め輸送船12隻と航空母艦1隻の大敗北であったと。万を越す将兵が戦うこともなく「水漬く屍」とされ、上陸した将兵も戦うこともなく、フィリピンの山野に「草むす屍」と晒される運命が待っているのであった。

マニラ上陸後、生き残った将兵で新しく部隊が編成され、私はマニラから千キロ南下したセブ島へ、更に400キロ南下したザンボアンガへと移動した。昭和20年5月アメリカ艦船数十隻がザンボアンガ沖に集結私達に対し艦砲射撃を開始した。その破壊力には只驚愕させられ、正確な命中率は日本軍の居場所を、島民がアメリカ軍へ知らせているのだ。私達はジャングルを切り開いて奥へ奥へ退却、逃げ落ちて行くのだから、容赦なく艦砲射撃が追って来るのだ。



食べれる物を探しつつ、四散し逃げる内に厳格な階級制度の軍隊組織も四散し、部隊を維持できず遂に解散となった。正に皇軍は崩壊したのである。四分五裂になった私達のグループはジャングルの中で生き延びるだけの生活を始めた。狙撃され死ぬ者、下痢疫病で死ぬ者、飢えて餓死する者、発狂、自殺など仲間はある内に激減していった。密林に潜む日本軍に対しアメリカ軍は飛行機から日本軍の敗戦を知らせ、集結場所を指定したビラを度々散布し降伏を勧告していた。

昭和20年10月頃、アメリカ軍からの降投勧告ビラに従い、病

とに話し合いが決まり、指定場所へ行った。既に数十名が集まっていた、トラックに乗せられ捕虜収容所に送られた。途中フィリピン人に囲まれたり、罵倒されたり、石を投げられたりしたが、私達をアメリカ兵が守ってくれた。収容所でも虐待もされず、順次日本へ向け送られ、昭和21年2月私は日本に生きて帰ることができた。

思えば、生き残ったのは奇跡の連続だとかしか言い様がないほどだと思う。亡くなった方々の無念さは計り知れないし、フィリピンの山中へ残された者の気持ち、残してきた者の気持ちを思うと、戦争はもうあってはならないと祈念するのみである。

「特別寄稿」 亡心れることの出来ないあの日

広島聖マリア幼稚園園長シスター 広田 和子
8月6日、当日の朝、父は勤務地である宇品へ行く途中、市内電車の中で被爆し、母は自宅近くに勤労奉仕に出かけて被爆、当時、中学生だった三番目の兄は学徒動員で作業に出かけたまま、今もまだ、分からないままです。

私は、近所の友人4・5人と自宅玄関の前で遊んでいて、爆心地から0・6キロメートルの場所で被爆。5歳でした。

その日の朝、いつもよりも遅く父は出かけて行った。兄も出かけ、母も出かけ、私一人が留守番をすることとなった。しばらくして、友達が集まってきたので、外に出てままごと遊びを始めた。仲良く遊んでいるその時、突然ピカッと今まで体験したことのない光とドンという音の中に「吸い込まれて」しまった。気が付くと真っ暗い世界の中にいるような錯覚になり、何がどうなったのかさえ、分からない状態、――破壊された建物の下敷きになっていた。

私一人ではないようだ、友達もいる、でも誰も声を失ったかのようには静かな世界。どうしたらいいのだろうか。走馬灯のように頭を働かせる。身体は動くのだろうか。このままここにいてはいけない。早くなんとかしなくては、――

遙か遠くに小さな明かりが見える。あそこから外に出られるに違いない。そこで友達と一緒に私が先頭になり、這って「光」を目指

して進んでいった。そして外に出ることが出来たのである。この時一緒だった友達はみんな亡くなり、私一人が助かったと、しばらくして知らされた。その時のことを語り合える友はもう居ない。

この「ひかり」が私の今までの人生の案内をしてくれることになる。いつもいつも「ひかり」を、どんな小さな光も見逃さず神様の示される光に向かって歩もう。聖書に出会って「わたしは道 光 真理である」を体験として、理解する恵みを頂いたことを感謝している。

さて、外に出られた私は幸いにも、自宅を目指して探しに来てくれた母親に会うことができた。偶然、私も元安川にいたのだ。また、そこで父にも会うことが出来たのである。三菱重工業(株)広島工場(安佐南区祇園)に勤務していた二人の兄が、工場から派遣された他の救護員と共に広島市内に入り、私たちを探し出してくれたお陰で、同工場の仮避難所に運ばれた。

幼かったが私は、言われるままに小さな看護師として一所懸命、本当の看護師さんのお手伝いとして水や薬などを運んだ。幼稚な私の働きを母や父は微笑み励ましてくれていた。避難所に入れないほど沢山の怪我をした人達がいて、大勢の人達が亡くなり戦場のようだった。大きな穴を掘ってその中に、亡くなった人達が入れられていった。

母は、私を傍らに呼び、静かに原爆2日後の8日に、父は水が飲みたいと言うので、急いでコップに水を入れ渡すと、美味しそうに飲み終えると、静かに息を引き取った。原爆3日後の9日のことである。僅か二日間で5歳の私は両親を、目の前で亡くしてしまったのだった。幼いながらも死とはこんなにも静かで 深く 重いもので、そして涙も出ない 厳粛なもの だった。

辛い

二人の兄がいたので、孤児になることもなく、きちんと教育も受けさせてくれたので、今の道、神様が導いて下さった道「修道生活」を感謝の心で歩んでいる。

今だからこそハッキリ言えることは、戦争は決してはいけないということ。戦争で失うものは大きく、誰一人幸せにならないということです。

ヒロシマそして舞鶴

橋詰 四郎

85歳の私は66年振に2度目の広島へ向った。最初は19歳、この広島から日本を離れ、現在中国東北の北満愛軍（アイゲン）第六国境守備隊へ派兵され、古参の守備隊員から「大本営は国境守備隊へ子どもを送り込んできた。」と、嘲笑とも取れる言葉で迎えられた。戦争で男を使い果たし徴兵年齢を19歳に下げたので、私の年代、大正14年、1925年生れを「最後の皇軍」と私は言う。入隊は町内の人達が隊列を組み神社で必勝祈願。日の丸の小旗を振りつつ軍歌を歌って行進、駅頭での挨拶は「不肖橋詰は、忠君愛国、滅私奉公、天皇陛下の御ために見事名譽の戦死を致します。」これが定番の挨拶。挨拶に合わせ景気よく「花火」を揚げる町内もあった。汽車が動き出すと見送る人達は大声で「橋詰四郎君万歳」「天皇陛下万歳」と絶唱絶叫。私は窓から身を乗り出し、見送る人達に敬礼の返礼。出征兵士は全国一律このように見送られていた。

盛大な騒ぎで入隊したが日本を離れる時は、広島の人達の眠るを待ち、真夜中にコッソリと人目に気付かれないよう。私語もなく四列縦隊、暗い大通りの中央を広島駅に向かった。聞こえるのは正確なリズムで刻む軍靴の音だけの静寂さで、莊嚴と思える程の心境だった。先頭を歩く私はオヤと思う光景を見る。進に合わせ両側の家々に電灯が先へ先へと灯されていくのだ。一瞬映画のワンシーンと錯覚する思いがした。ふと気付くと家々には日の丸の旗が掲げられ、寒い真夜中に着替えもせず寝間着姿で、街路樹や電柱の陰に身を隠し、私達に向かって合掌。「拝んで下さっている」のだ。

私は品川区に住んでいた。板塀や電柱に「中野正剛大演説会」の張紙があると出かけた。会場は区の公会堂。品川、目黒、港区が私達が歩ける範囲だった。後に氏は東条内閣の転覆を企て発覚し、捕らえられ割腹自殺をした人物である。氏は徴兵適齢期の若者に、「戦争で死ぬな」とは言えぬ時代なので「天皇陛下の御ために手柄をたて、生きて帰り手柄話をしなさい。これが一番の天皇陛下への忠義であり親孝行である」と力説していた。その影響か私は戦争で死ぬのは「愚」と思っていたが「拝んで下さる」人達に向かって私は挙手の答礼をしつつ「広島の人達のためになら喜んで死んでみせる」と、自分自身に言い聞かせ、死ぬ覚悟を新たにした。

守備隊の任務は、全員玉砕してでも3時間だけ守り切る。これが天皇陛下からの「絶対命令」だと叩き込まれ、日夜人間爆弾で戦車

に体当りする猛訓練に明け暮れ、この3時間で他の関東軍が戦闘準備を完了すると聞かされ、3時間死守すれば金鵄勲章（天皇陛下から頂戴できる軍人の最高位勲章）と言われていた。8月6日午後、私は大隊本部で中隊長に渡す命令書を受理し、違反承知で開封盗み読みした。三行の簡単な命令書で次のように書いてあった。

一、広島に新型爆弾が投下された。

一、兵を屋外に出す時は白の長襦袢を着せ皮膚面を露出させるな。

一、兵の逃亡脱走に留意すべし。

軍隊では、シャツを襦袢。ズボン下は股下（こした）と称した。

新型爆弾は皮膚に触れると、前例のない悪性な炎症を起こす糜烂ガス弾だと思った。命令書を渡し暫くすると「読んだか」と聞かれ、正直に「ハイ」。中隊長は少し間を置き考えてから「誰にも口外するな、これが命令だ。」と厳しい口調で言われた。私は「新型爆弾」を中隊長が部下全員にどのように伝えるか興味をもったが、伝えぬ間に9日ソ連軍の攻撃。3時間どころか、強力なソ連戦車軍団を相手に死闘を展開しつつ対等に戦い。21日ソ連軍将校が白旗を大きく振り日本軍陣地へ、勝ったと大騒ぎ。そして敵から15日天皇がラジオで負けを宣言したのを知らないのかと、教えられた。

捕虜になれば家族が差別されると拒否。単独逃走を選ぶが会話もなく曜日も判らず、戦わず降伏した部隊に遭遇し「はぐれ兵」として拾ってもらう。シベリアではソ連の労働者から「広島、長崎アトム全滅」と教えられたがアトムが理解できず、新型毒ガス弾だと思ひ込んだままだ。2年後、地獄のシベリアから生還した私は「面汚し」「それでも日本男子か」と罵詈雑言を覚悟して舞鶴平（たいら）栈橋へ上陸第一歩を踏み入れた。罵倒も非難もなく舞鶴のお母さん達の暖かい労いの言葉で、肉親も差別されていないと確信した。

生還し最初にホッとさせてくれたのは舞鶴のお母さん達であり、戦車軍団との死闘から始まり、死の抑留を生き延びた数々の死の境は、広島の人達の祈りの賜物だと感謝した。そして拝んで下さった「命の恩人達は」「アトム」で街と一緒に。私だけ残されたのだ。

残された私は今、妻と元安橋の中央から川面を見下ろしている。妻の小さな声が祈りのように「なんと美しく澄んだ綺麗な川でしょ。この美しい流れが……」と、絶句。二人の目から涙が川面へ……流れの中から『核を廃絶させて。』の声が聞こえてきた。81歳の妻は私をヒロシマから、舞鶴の「引揚げの母」の墓前と「平栈橋」へ誘った。



妻に祈る数知れぬ死に憤る異国で踏めず土の祖国

こたまする
引揚船の
海鳴りに
天地もさけよ
今君帰る
花香
ハナさんの
碑の前で
橋 詰

舞鶴平 (たいり) 棧橋
敗戦時、大陸にいた日本人は棄民扱にされ、生死を分つ逃避行の運命を背負い、筆舌に現されぬ苦難の道を辿る。生きて日本の土は踏めぬと覚悟した引揚者が、諦めていた祖国への最初の一步がこの「平棧橋」で六六四、五三一人の喜びと悲しみの涙に濡れ、その涙が染込んだ棧橋なのだ。

棧橋は木造で朽ち果て無くなってしまったので、シベリア生還者が二千六百万円集め、舞鶴市に「引揚の史実」として復元を申請し、1994(平6)年五月二十七日、舞鶴市市制五十周年に併せ復元式を「引揚者の母、田端ハナ」さんのテープカットで、当時を再現し船からの上陸も行い盛大に行われた。

木造なので復元も朽果て承知で木材を選んだ。材質は檜の三倍耐久すると保証されているアフリカ産コンボシ材で、コンボシ材の原木輸出は禁止されているので、図面を送り製材加工されたのを輸入し現地で組み立て完成させた。尚棧橋復元に努力した人の名も掲示され、私は記録係「舞鶴平棧橋復元式」ビデオ47分を制作。

日曜日 2006年(平成18年)7月9日 版14

舞鶴「引き揚げの母」

田端 ハナさん(たば



た・はな 平和祈願万国戦没者慰霊の会元会

長 引揚を記念する舞鶴・全国友の会顧問(7日、老衰で死去、99歳。葬儀は9日午後1時から京都府舞鶴市倉谷1720の4の西舞鶴シテイホールで。喪主は長女の泉朝子さん。自宅は同市南田辺71の3。

舞鶴港で戦後、同市連合婦人会長として多くの引き揚げ船を出迎えたことから、「引き揚げの母」と呼ばれた。

死体は谷底へ

市田 高支

すぐ帰すと言う言葉に騙されて、最初の冬を生き抜いてシベリアの果てとも思えるタイシェットに居る。夏服のまま拉致されているのだからたまったものではない。酷寒、凍死、飢餓、重労働、虱、南京虫、発疹チフスで毎日大勢が死んでいくのだ。死ぬと着ている物をフンドシまで全部はぎ取り、外に放り出せと命令されている。通夜も告別もさせないのだ。薪木のように積み上げトラック一台分位になると、生き残っている我々が、コチコチに凍った屍を担がされて5キロ位離れた山の上まで運ばされるのだ。この行列を想像してもらいたい。

埋めるためのスコップも無いので警戒兵（コンボイ）に言うと、「このようにせよ」と、谷底へ蹴落とすのだ。戦友として到底出来ないと拒否するや、5、6人のコンボイが一斉に我々に向かって発砲するのだ。我々も明日死ぬかも知れないのに、今が生きたいのか、あわててまるで競争するかのように、言われた通りのことを早く片付けて、この場所より少し暖かい収容所へ早く帰りたいのだ。

日本も裕福になり、旅行会社がシベリア旅行を企画したり、シベリア墓参報道なども報じられ「墓標が整然と立ち並び、手入れも管理も行き届いている」なんて書かれていると「嘘つきロシアに騙されているぞ」と、叫びたくなる。

ロシアが案内する墓地以外にこのような、おびただしい墓標のない遺体が重なりあって放置されていることを知ってほしい。

魚が屍体を

高森 香

驚が鳴き初め、桜の下に寝転んでいれば眠くなるような良い気分である。

私も今次大戦に参加し、敗戦後はシベリア抑留より辛くも生還できた者の一人としての使命は何かと考えさせられ、祖国の勝利を信じ無我夢中で戦うことに専念した歳月のいかに短くはかないものであったかの思いが胸中に去来している。自分の抑留体験を通じ「平和の尊さ」をなんとか語り継がねばと思いつながら、平凡な人間が積

み重ねていく日々が何十年になつてゐるのに驚くと共に凡愚な生活が打ち続き、尊い時間が身の回りから飛びでていくのが口惜しい。自分の味わつた凄まじい苦難の体験を他の人に実感させることは極めて困難である。だが無力な元兵士の体験記録も、いつかは後の世に知って頂ける時期もあるだろうと、敢えて一端を披露し後世に残したいと思う。

見上げると底知れぬ灰色の空から紛々と粉雪が舞い落ちて、今日もマイナス40度以下だろうの寒さのもとでの重労働と飢えへの恨みは、未だに忘れることができないほど身に徹して、苦しいものだった。コムソマリスクの収容所で、労働して生きていくには余りにも粗悪な上に少量の食物に悩まされ続けていたある日、黒パン30グラム増量の仕事と引き換えに土掘り作業の募集があった。

飢えで餓死者が出ている収容所内であるから歩けないような病弱者までが、30グラム増量作業に名乗りを上げ丈夫と思われる者が数名採用され、土掘り仕事は夥しい日本人の遺体を埋葬する墓作りだと判明した。それにしても土は凍っていてコンクリートよりも固いし、スコップ自体不良品で土に食い込んでいかないのだ。警戒兵（コンボイ）は進まぬ穴掘りに業を煮やし「こちらへ来い、良い方法がある」と私を呼ぶので多分、遺体を埋葬出来るやわらかい場所を見つけたのかと近寄ると、コンボイは木ソリを指差して、「タスカイ」運べ」だった。

それから二人一組で、天幕から40メートルほどのなだらかな、それでも滑りそうな坂道を運んだ。遺体は冷凍魚のようであった。その頭を一人が抱え、もう一人が足をもち、ゆつくり滑り転倒しないように坂道を下る。遺体は骨と皮そのもので軽かった。太腿ですら5センチとなかった。20キロほどの重さしかなかった。遺体の手首にはガーゼの包帯が巻いてあり番号が記入されていた。目印しだと思いが、ガーゼにはどれもみな四桁の数字が記入されていた。毎日大勢死ぬので亡くなった順番で千人台になつてゐるとそう考えた。このとき運んだ人達の半分位は、みぞおちから臍にかけて切られた跡があり多分遺体を解剖したのだろう。腹の中が空洞の人もいた。

それで木ソリに乗せる際に、私は誰か見覚えのある人はいないかと、霜で覆われている遺体の顔の霜を払ってあげた。けれどみんな丸刈りで、体毛も総て剃つてあるので身体つきは中学生のように小さく、痩せ細つて人相も変わつてゐる。到底判らない顔だった。コ

ンボイは例によって作業が捗らないのに怒って「ダバイ・ブストラ
|| 早くしろ」と怒鳴るだけだ。

そして次の日も同じ場所に連れて行かれ、浅い穴に死人を埋めよ
の命令だったので、やれる訳がないと抗議するとコンボイは、私を
手招きし「こっちへ来い、見せるものがある」と言うので、仲間か
ら離れて付いて行った。林の中に少し入ると立ち木を伐採して広い
空地が造成され、天幕が三か所に張ってあって天幕の前には霜の下
りた薪が積み上げられていた。私は天幕に道具が保管されているの
だと思い、何故もっと早く道具を渡さないんだと半分怒りながら天
幕の裾を捲り上げた。

冬の遅い日の出の弱い朝の光りの射し込む内部を見て茫然とした。
天幕の中はなんと死人が積み上げられて、死人の山だった。薪を組
むように積んであった。天幕の外は薪と思つたのも、天幕に入り切
れないから外に積んだのだった。他の天幕もみな同じで死人の山で
あり。同胞の戦友達の遺体で慄然とした。その遺体全部が生まれた
ままの姿にされて、凍って、皮膚には数センチ位の霜が浮くように
付き遺体が霜で覆われているのだった。どの遺体も触れるとつるつ
と滑る程に小さなマネキン人形が積み上げてあるように。

地獄そのものだった。或る人は虚空を掴むかのように片手を突き
上げ拳を握りしめている。ある戦友は右手の四本の指を口の中に根
元まで突っ込んで。或る人は股間を握り締めた姿で、死を看取った
戦友がさせたのか胸の上で合掌した人もいた。瞼を閉じた人、膝を
抱え込んでいる人、そんな惨状を見ると、こんなになるのか俺はど
んなことがあっても死ねんぞ！。這ってでも帰ってやるぞ、死体の
前でそう決心した。

トラックが一台来た。遺体を無造作にトラックに投げ込み積み上
げると大体70体の遺体が積めることが判った。何処へ運ぶのかト
ラックは土手を登り、緩い勾配を河に向かってバックし荷台を下に
して停ると、助手席からコンボイが降りてきて、私も荷台から降り
た。私は積み込んだ遺体の上に乗っていたのだ。真下の河面の氷が
数メートル四角にきちんと切り取られて水面が見えていた。コン
ボイは私に氷の穴を差し次いでトラックの遺体を指差した。そして
それからトラックから遺体を降ろすと上手に滑らせた。変なことだ
が遺体はよく滑った。

土が凍っていて掘れないので水葬に切り替えたのだ。一体一体抱

えるように水葬にしたらコンボイが例によってダバイ・ダバイと騒ぎ立て挙句に荷台に上がって遺体を足で蹴り落すのだ、丁寧に一体水葬にするどころか、どっと滑り落ちてくる沢山の遺体に巻き込まれて私も水葬にされそうなので、慌てて避けながら手当たり次第穴に投げ込まないと私も巻き添えにされるのだ。コンボイは最初からそうしていたらノルマも上がったのにと私を叱った。死体を葬るのも一日何体とノルマがあるのだ。日照時間4〜5時間で一日何体だろう70体×4回だろうかと思う。

終わったと思ったらコンボイがトラックの荷台に登れと言う。トラックには白樺の枯枝が散らばっているのだ、コンボイが片付けよと言うのでよく見ると千切れた足や腕なのだ。荷台の鉄板に凍り付いているのは足で強く蹴らなければ取れない。15・6本も残っていた。私は一本一本大切に抱え込んで静かに水面まで歩いた。コンボイがブイストラ・ダバイⅡ早くしろ。と、怒鳴っているのを聞きながら慌てなかった。

私は流しながら流れようか日本海まで流れてくれ、そうして魂だけでも日本の土を踏んでくれと水面に祈った。すると水面が渦を巻くように動いたのだ、私は水にも心があつてシベリアに抑留されている日本人に同情してくれているのだと思つた。なんと水葬にした遺体に大きな魚が群がっているではないか、ボラのようなニベのような、コイにも見える、コンボイの持っていた丸太を奪うように取って魚を殴つた。大きな魚は突いても恐れもせずゆらゆらと尾鰭を動かしていた。

これが30グラム他人より多くの黒パンを食べたいばかりの仕事とノルマだった。今でも河畔に立つと23歳のあの時が悪夢のように蘇る。私は何故か魚釣りをしないし川魚も食べない。私はシベリアから生還してきてあの河の名と場所を知ろうと地図を買って調べたが「ゴーリン」と発音する地名は載っておらず、まして河の名前などは……。夥しい日本人を埋めた場所の名も、夥しい日本人を流した河の名も伝えることができない無念さを知って下さい。

三日後、私は30グラムの増食はいらぬと死と隣り合わせの伐採に戻つた。私はこんな話はしたくないと心に決めていたが、高齢になり長く続いている平和が私の死後も続くようにと願い、亡くなつた戦友の霊を私が話さなければ誰にも伝わらず、伝わらずに知らない事は無かつたことと同じだと思ひ、心に鞭を打って真実をありの儘にお伝えし無惨なこの鎮魂談の本意を汲み取って頂きたい。

死を呼び込む坩堝に生きて

伊藤 善吉

1945（昭和20）年8月9日、北満（現中国東北）アイグン第六国境守備隊へ戦車軍団を先頭にソ連軍攻撃「石にかじりついてでも3時間は死守せよ」が至上命令で訓練演習通り敵戦車軍団へ砲弾を沖繩、九州へ送り弾丸のない砲兵隊から「俺等の庭を土足で踏み荒らす赤い狐め」と一人一戦車爆破の肉弾特攻攻撃。彼我共に大打撃を受けつつも対等に戦い、21日ソ連軍より日本の負けを知らされ降伏。徒歩で日本軍を集結させた南満孫吾へ。ここで千五百人単位でウラジオストクから日本へ帰すと編成され北上。再度六国激戦地を通り黒河へ向かう。激戦地は敵味方の戦死者がそのまま放置され、白骨化が進み強烈な死臭が充満している。ソ連の味方の戦死者も敵と同じ放置扱いの非情さに背筋が凍る思い。

この放置戦死者はシベリアへ連行した日本人で、病氣や怪我などでソ連では使えなくなった厄介者を翌年3月、凍結した黒竜江を徒歩で黒河へ追放した。その一人に六国の上村（豊橋市）がいた。上村は八路軍の食事療法で回復し、6月、八路軍の監視下で放置遺体を埋めてきたと証言している。

8月末、黒河に到着した我々は黒竜江を、両側に水車の付いた外輪船で、対岸のソ連領ブラゴヴェシチェンスクへ渡った。この時こぶし大の雹が我々の前途を予告するかのようになり襲いかかってきたが、我々はここから列車にゆられ一路ウラジオと信じ、降伏を拒否し離脱した戦友達の安否などを話し合う余裕があった。

前後左右をマンドリン（自動小銃）で武装したソ連兵に囲まれ我々は負けても関東軍だと整然と隊伍を組み行進。どこでも同じように好奇心の強い子ども達が集って来た。どの子どもも破れ服の貧しい服装で素足に靴もなく裸足に驚く、大人の男も子ども同様ボロ服に裸足もいて元氣なさそう、まともな男は兵隊かと思ひ人材不足を感じ、敗戦国の我々の方が服装も立派で毅然としていたと思った。駅へ行き列車でウラジオへと、異国の景色を見ながら歩いていたが途中から不安が先走る。歩くほどに人家が減り遂に360度畑と草原で日没野宿。北満でも夏の夜は寒くて冷える、ソ連兵は身の丈もある長い外套にくるまるが我々は夏服だ眠れたものではない。そして一日中馬鈴薯掘りの収穫作業。拳半分ほどの馬鈴薯を2コ貰い昼食と夕食だという。一日歩き野宿、一日薯を掘り一日分の食料だと掘った薯を数個貰い、毎日これを繰り返す間違いなく東でなく、北へ西へと歩かされている。

北満六国で冬を二度迎えたがこも同じ秋がない。昼間時雨れその夜霜が降り、次の日に霰が降り夜に氷が張り後は加速度に真冬へだ。一週間ほどで我々は人としてもブライドを喪失してしまう有様だ。熱発者が出て野宿の霜に包まれた死者が出る。歩けず座り込むとそこが墓場だ。死んだ者は収容されずそのまま放置で次の馬鈴薯畑へ移動。我々はソ連軍を殺した報復戦場に晒されていると確信した。そして野宿、歩く、薯掘りを一か月繰り返し1/3の死者と重病患者を出しライチハで野宿は終わったが、人間性を100%剥奪され、飢餓と石炭掘りと石切り重労働で更に1/3が死ぬのである。

— 20 —

1946（昭21）年2月、この冬の寒さは特別ひどいとロシア人が言うほど寒かった。復員してから知った10中隊橋詰は「罪々と九月囚われの雪舞い始む」「万物は凍てて二度目の冬も生く」の俳句を作っているがその通りだと思った。特別に寒いのは我々捕虜には数倍身に堪える。食事は量が少なくお粗末、仕事はダワイラボータ（働け働け）誠に憐れ。これが関東軍六国の成れの果てと皆泣いた。

朝、呼吸が苦しい、咳をすると胸が潰れるように痛い、頭はガンガンして耳鳴りがひどい、これはと診察を申し込む。熱は39度以上で急性肺炎と診断され入院は明日。その日と夜は何の手当てもなく高熱にうなされ実に苦しく、この状態で大勢死んでいくのを見ていたので俺も死ぬと思った。死線をさまよっていると「判りますか荒木です」と名乗る声がかすかに聞え注射を打たれた。注射は実に良く効き嘘のようにスーと楽になり、改めて注射とはこんなに凄く効くものかと驚いた。荒木君は私と同じ六国3中隊。なんでも私に恩義があるとか云う衛生兵で、最後に残った一本の注射液を自分自身の護身用に隠し持っていたのを私に使ったのだ。1988（昭63）年11月三重県鳥羽での戦友会で荒木君にお礼をと参加したら、物故者名簿に入っていた。人間の「運」「悲運」を改めて痛感した。

翌日入院。病院とは名ばかりの築数十年の木造事務所の部屋区切りを取り払い、木造台にアンペラを敷き患者一人に毛布一枚で、一室に30台不規則に置いてある。ロシア人医者が捕虜の通訳を連れ回診。錠剤を一日二個くれ静かに寝ておれと言うだけ、私は高熱で胸は苦しい。看護師は一人もいない。捕虜の衛生兵が忙しく時たま顔を出す程度で頼み事など出来ない雰囲気だ。仕方がないのでトイレの手洗い水でタオルを濡らし頭に置いたら、ロシア医者が顔を真っ赤にして「熱を内部に押し込める」と怒り、マスクは呼吸を困難にするからダメだと厳禁、日本の医療常識が通用しないのだ。

ここで2005(平17)年7月9日、名古屋市緑区で行われた第17回戦争体験を語り継ぐ集いが発刊した「戦時体験記録集第12集」に掲載されている「多田軍医」の手記を一部紹介させて頂く。『ソ連軍医が裸になった捕虜の尻の肉をつねって、肉の付き具合で「I群」「II群」「O・K」オーカ(アズドロヴィヤ、カマンダ・栄養失調症の略語)』に振分ける。』

I群II群は働くクラス。オーカは入院クラスだが、発熱37度台以下は健康と診断して働かせるのだ。多田軍医も私と同じ六国で、アラチカ・ブレイヤ・ライチハで医者として働かされ1949(昭和24)年12月舞鶴上陸の人物。軍医はライチハでは助かる病人が、アラチカ・ブレイヤで大勢死んでいった。と。私は幸運だったのだ。

虱の媒介で感染した発疹チフスの捕虜が亡くなった。死ぬと患者に寄生していた虱の大群は一斉に隣の患者へ移動する。入浴なし着替えなし血便垂れ流しの真っ黒に汚れた体と衣服の上を、真っ白な虱が生き血を求めて我先に移動するのだ。召集兵らしい40歳前後の患者が入ってきたが、随分年寄りのオッサンに見える、一言も言わずウンウンと苦しんでいるだけ。体温も計れないので私が計ることになる。体温計を差込むと直ぐに40度を越す高熱で飛び火のようになりに移る思いがした。彼は足がだるいのか膝を立てているので排便垂れ流しの悪臭が凄い。ここは病院の病室でなく生地獄の真っ直中だと捕虜は思っているのだ。

病人食も健康な捕虜と同じ黒パンだが病人には量が少ない。隣の患者が食べているのを見た事がない。四、五日して突然はいれんを起こし死んだ。毛布を取ると胸の上に黒パンが山のようにあり、高熱で100%乾燥して粉々に崩れている。直ったら食べようと手ばなさずにしっかりと抱いていたのだ。食欲がなければ食べれる戦友に回すことも惜しんで、死んでいったと思う人間の裸の姿かと悲しくなった。毎日何人か死に死んだ数だけ入ってくる。死ぬと必ず解剖されソ連医学に貢献しているのも賠償金の一部だというのだ。捕虜の死は酷寒・飢餓・重労働・これらが原因で疫病に罹る100%とまでとは言わぬがソ連の責任だ、賠償金の肩代わりで医学貢献者を増やしているのだろうか。

入院して20日ほどして同年兵の西浦が入ってきた。喉をゼーゼーさせながら苦しそうに「伊藤、生きていたのか、お前は死んだと噂されているぞ」と。彼は、素人目にもかなりの急性肺炎しかも重症と判る。その晩は益々苦しそうで「水をオーイ伊藤水をくれ」と盛んに叫び訴える、ここの水はトイレの手洗い水だけだし、絶対水

を与えてはいけないと知っていたが、彼の訴える目に負けてタオルに含ませて飲ます。彼は美味しそうに和やかな顔になり「もう少しオマケしてくれ」と精一杯の笑顔でねだるので、……。目に一杯涙を溜めてア・リ・ガ・ト・ウ。これが最後の言葉だった。その夜私は号泣した。思えばこの歳までに親友、親戚、父母と死に遭遇して泣いたが、あのような号泣はこの後もないと思う。

入院して約一か月、同室の1/3が死んだ。入院イコール死、回復ゼロとされていた。これはよほどの重病者でなければ入院させないからだと言われていた。死ぬと屍小屋に積み重ね死体が凍ると解剖の刃が入らぬので、凍らないよう捕虜が24時間交替で石炭ストーブを焚くのはオーカの仕事ノルマだった。これも賠償金の肩代わりと諦めていたとか。私は相変わらず高熱が続き38度からなかなか下がらない。ロシア医者は毎朝検温表を見て首を傾げていた。捕虜患者の中にマホルカ（ロシアの自家製粗悪煙草、西部劇で見る紙に巻いて喫煙）を持っていて私に吸えと勧める。肺炎患者の私に良い訳けがないが試しに吸ってみると実にうまい。我を忘れて毎日貰っては吸い続けると、不思議な事に熱が段々と下がってきた。計ると36度位に下がっている。医者の二個の錠剤薬よりも効果抜群だ。退院させられると「ダワイラボータ」の石切り重労働が待っている。ので体温表に高熱数を入れ、下熱は人生終焉前の一瞬の輝きかと思ひ分析し、半分本気、半分冗談で遺言として「シベリア捕虜に春は来ぬ」の詞を書き終え40日の入院生活に別れを告げた。

頼みの戦友は病に倒れ／語る想いを涙で知らせ
無念の心がやるせなく／祈りも哀れ戦友は逝く
アア：シベリアに／捕虜には／春は来ぬ

この世の生地獄の一つ、ハッパと不意の崩落に怯える恐怖の石切り場に戻った。ハッパで掘り出した巨大な石を用途別に粉砕する。私は鉄道線路用にして引込線の場合までターチカ（一輪車）で運ぶ。復職？して驚く話を聞かされる。私の入院中に多田軍医が医師職を剥奪され罰として石切り作業を強制させられたというのだ。理由はライチハで衛生兵が退院間近い患者に水を飲ませ殺したというのだ。ライチハ病院のロシア医師が、看護の初歩的常識を衛生兵に教育しなかったと告訴したからだ。アラチカ・ブレーヤを任されていた軍医は、ライチハでは助かるとライチハのロシア医師を評価しているのに、それを知ってか知らぬか、しかも私の過失を誇大化して私は胸が痛んだ。一週間位して市長よりも偉い地区党員が直接、病人が待っているぞと作業現場へ迎えに来たと。救う神あり感謝。

―満州第六国境守備隊付―
從軍看護婦回想録

小宮山 里野

婦人從軍歌

一 火砲(ほづつ)の響き遠ざかる
跡には虫も声たてず
吹きたつ風はなまぐさく
くれない染めし草の色

四 真白に細き手をのべて
流るる血しお洗い去り
まくや繙帯白妙の
衣の袖は赤に染(そ)み

二 わきて凄きは敵味方
帽子飛び去り袖ちぎれ
斃れし人の顔色は
野辺の草葉にさも似たり

五 味方の兵のうえのみか
言も通わぬ敵(あだ)迄も
いとねんごろに看護する
心の色は赤十字

三 やがて十字の旗を立て
テントを目指し運び行く
テントに待つは日の本の
仁と愛とに富む婦人

六 あな勇ましや文明の
母とい名を負い持ちて
いとねんごろに看護する
心の色は赤十字

日本赤十字山梨支部で奉職中、第462救護班要員として、満州(中国東北)の北満、孫呉(そんご)陸軍病院に配属されたのは、戦争もたけなわの1943(昭18)年8月上旬だった。赴任すると満州は想像通り広く壮大な原野に、軍歌「戦友」の歌詞：赤い夕日に照らされて：そのままの真赤な大きな夕日が水平な地平線の彼方に沈む輝きは筆舌では表現出来ぬ感動ものだった。

内地と同じ満州も戦争がないので、患者は演習や訓練などの怪我人か病人、冬は凍傷などで、退院や戦闘訓練を終えた兵隊達は南方へ転属させられて行った。関東軍の将兵が喫煙する煙草は「極光」という銘柄で、満州以外の土地で「極光」の吸殻や空箱が散乱している、関東軍移動と判るので諜報上「極光」携帯禁止令は南方と覚悟して転属して行った。戦争が熾烈になり各部隊、退院の兵隊達も続々「極光」携帯禁止転属が増え、兵の数により何人かの看護婦も同行転属し、病院も手薄になり勤務は超多忙を極めた。

地平線の夕日にも慣れ、月日が経ち年が替わり、1945(昭20)年、迎春花(インチュウホウ)の咲く5月、同僚3人と更に最北陣地の愛軍(アイゴン)第六国境守備隊へ業務援助の派遣を命じられた。渡満して三度目の夏が訪れた。孫呉は師団司令部もある都

なら、愛軍は鳥も通わぬ辺境の地だと聞かされていた。第六国境守備隊は愛軍陣地に工兵一個中隊、砲兵三個中隊、歩兵八個中隊。朝水（チョウスイ）陣地は砲兵一個中隊、歩兵二個中隊の最前線陣地で、帝国陸軍だのに天皇陛下から軍旗も下賜されていない、全滅してでも三時間抵抗すれば、作戦大成功の捨石守備隊だと聞かされていたので、それなりの覚悟はした。

懸念であったソ連の攻撃が始まった。看護婦達は「三時間の命よ」と励まし合ったのを覚えていた。私達の任務は一刻も早く負傷兵を安全な場所へ移送することであった。絶対安静の担送患者まで全員を担架で山奥の陣地にある壕へ運ぶ作業を必死で行い、そして再び戻る事は出来ないであろう病院を自分達の手で焼き払い、燃え盛る炎を背中に浴びながら壕へ向かった。壕の中は蟬燭の明かりが頼りで、負傷兵の血生臭い匂いと苦痛で叫ぶ声の中で看護に当たった。新たな戦傷兵も次々運ばれてきて、僅かな衛生材料で、水もなく十分な手当てが出来ない悲惨な状況であった。圧倒的に多いソ連軍は直ぐ壕の出入り口を発見し、入口を目標に日夜迫撃砲を休む間もなく撃ち込み、日本軍を壕の中に封じ込む作戦に出た。武器弾丸を沖縄と九州へ送り、戦車攻撃用の爆薬しかないのだ。出撃する幼顔の兵は「小宮山婦長殿 00上等兵は明日正午、肉迫攻撃に出撃します、お願いです手を握って励まして下さい」と。無駄だと知りながらも決められた順番に、爆薬を抱いて敵戦車を爆破するため壕を出て、誰一人として帰ってこなかった。

8月15日頃からソ連軍の攻撃が弱くなってきた、守備隊はソ連軍の戦力低下だと意気天を衝く武勇になり、攻撃の手を緩めるなど盛んに執拗に出撃を繰り返したが、敵の固い防御に敵戦車にたどり着くことが困難になっていくようになった。その証拠が壕の出入り口への迫撃砲の攻撃もなくなっていた。次の日も、また次の日も……私達はおそろおそろ外に出て綺麗な空気を充分吸った。忘れるような静けさの数日が続いた、この間も麓の方では出撃した守備隊兵を狙い撃ちするソ連兵の自動小銃音が聞こえ、戦車爆破成功の大炸裂音は聞こえてくることはなかった。

収容した負傷兵の何人かが昇天した。その都度私達は遺品を整理して遺体を近くの安全な場所に葬り、その度に出撃して帰らぬ兵士は野晒しのままと思うと、死者の無念と、ご遺族へ思いに心が痛んだ。食料も底をついてきた21日の朝、ソ連兵が白旗を掲げて近付いて来た。私は不思議な面持ちで見守っていた。強力なソ連戦車軍団の侵攻を人間爆弾で食い止め、ソ連軍と対等に戦い陣地を守りぬ

いている守備隊は、白旗を降伏の軍使と思い「日本が勝った、万歳・万歳」と喜び感激し踊り狂って男泣きする者もいた。そして15日に天皇が日本の負けをラジオで全世界に向け放送し降伏していると教えられ、握りこぶしを膝に押しつけ、一同無念の涙にくれた。

あの悲壮な攻防戦は何だったのかと思うほど守備隊は抵抗もせずすんなり降伏し、武装解除させられソ連軍に連行された。無敵を誇った関東軍の中でも、独立国境守備隊は精鋭集団と認められていたのが、静かに降参する不思議さを沈黙して見守っていた。残された私達は茫然自失で、どのように兵隊と別れを告げたのか定かでないが、北へ向かって力なく歩む将兵の武器のない、軍服だけの後姿の印象は忘れる事は出来ない哀れさがあった。戦車を爆破する火薬と体一つで三時間死守せよの守備隊員は、9日から今日まで、助けてと逃げ込んで来た大勢の老若男女を全部保護し、非戦闘員の私達一人も死なせずに守ってくれた。守った方法を私は知っている。順番に死ぬと知りながら敵戦車へ、戦争が終わっていることも知らずに出撃し、民間人の命を守った守備隊員の姿にその誇りはなかった。

私達は歩くことの出来ない負傷兵を馬車（マーチヨ）に乗せ、愛軍から朝水を通る軍用道路を孫呉へ向け徒歩で出発した。軍用道路は筆舌では表現できないほどの戦闘が展開されていた有様を、戦死者の携帯していた武器弾薬もそのまま誰も片付けず散乱し、擱坐炎上した戦車、敵、味方の戦死者。軍服で区別出来る白骨化の進んでいる遺体。この凄惨な姿におののく私達と対照的なのは負傷兵達だった。負傷兵達は自分達の守備地域を「俺等が庭」と呼び、土足で踏み込んで来たソ連兵が許せないのだ。散乱している武器弾薬を、負傷兵達は隠し持ちたいと私達にせがむのだ。前方の峠から朝水守備隊の防衛地だと負傷兵達が話し合っていた。

峠への道は戦死者の放置死体も見当たらず、長いだらだら坂で、疲れている体に鞭打って一生懸命歩き、峠に着いたのは日没後。高い地形は見張り易いのかソ連兵が宿泊場所と決めた。テントも毛布もなく、そのままの姿で野宿と決まった。自動小銃を小脇に抱えたソ連兵の監視の中で、恐怖と夜は冷込む北満の夏なので、ガタガタ震えながら肩を寄せ合い、横になる寝姿は一人もなく、腰を下ろしたままの一夜だった。しばしまどろむと夜が明けた。目覚めた者から騒ぎ出し見回すと、朝水陣地へ向けソ連兵の死骸があちこちに藁人形の様に横たわっていた。日本兵の死骸は見当たらないのがせめてもの救いだった。

言葉の通じないソ連兵に追い立てられ、乾パン10粒の朝食を食べ、重い足を引き摺り出発した。朝水守備隊激戦地の山麓を通る。前途喪失の一般人と対照に、気持ち盛んなのは負傷兵だ。その彼等も守備隊攻防戦の凄さを目の当たりにし、士気消沈したようだ。道路沿や陣地付近に掘られた「蛸壺」を味方に、ソ連の戦車や軍用車両、数両炎上させたり転覆させ、戦死者もソ連軍が多く「朝水は日本が勝っている」と思いながらも固唾を飲んで、全員沈黙し私語もなく恐る恐る歩いた。突然ソ連兵が狂ったように大声で叫び、死骸の日本兵へ向け自動小銃を乱射し、私達もと覚悟した。この事件後、負傷兵を始め全員敗戦国民と再認識したのか、おとなしくなり無理勝手を言う者はいなくなった。

半日かけ朝水守備隊激戦地を抜けたらしい。悪路を進むと道路沿いにモンペや和服の死骸が現れた「守備隊へ逃げ込んだらわしらのように助けて貰えたのに」と、老婆が死人に教えながら念仏を唱えていた。自殺か、ソ連兵に撃たれたか、満州人に殺されたか判らない。親方日の丸で満州人の土地財産を取り上げ、侵略者日本人入植者に無償で与えた。反抗の態度を見せると憲兵に逮捕され731部隊と言われ「日本鬼子」「リベンクイズ」と陰で怖れられ、表面だけニコニコしていたのを見抜けず、仲良しと錯覚していた。王道楽土・五族協和は日本の独り善がり、日本を憎む者はオロチオンを除き。国境ほど多いとも言われていた。

汗とほこりにまみれ6夜野宿し、ようやく孫呉の原隊を探し「小宮山婦長以下3名、愛軍より負傷兵、在留邦人を引率して只今到着しました」と申告後倒れたようだ。気が付くと苦力(クーリー)小屋の土間、土の上に毛布一枚で寝かされていた。満州国でのご主人様は日本人だったのが、敗戦で全部没収され貧民窟へ追いやられたのだ。心身共にやつれきった病人の中には「殺してくれ」と叫ぶ人もいた。「祖国へ帰る日まで頑張るのよ」と励ましつつ、あふれる涙をどうすることも出来なかった。ここでも僅かな医薬品で看護を続けた。コウリヤン粥をすすり、野草を食べ、遜比拉(ソンピラ)川の小魚を蛋白源にして。

大陸に秋はなく、一足飛びに冬將軍が来襲するのだ。土間にアンペラ一枚の小屋は日毎に寒く、捨てられている古枕木を燃やし暖を取ったりもした。逆境で不潔なので虱(ホワイトチーチー)が大量に発生し、発疹チフスに全員がやられ、私も高熱が一週間以上続き、熱にうなされ故郷に帰った幻覚が朧気ながら記憶に残っている。栄養も摂取できず、フラフラして骨と皮ほどに痩せた体に鞭打って、

交互に看護を続けた。他人を頼る人から脱落（死）。頼られている私達は倒れても立ち上る力だが、知らず知らずにあつたようだ。そして1946（昭21）年の秋、命からがら祖国の土を踏んだ。

私は一つの事を成し遂げた。私が看た人のお名前、性別、年齢、本籍地を記録していたので、昇天すると「遺髪と爪」を記録紙で包み、日本のご遺族に私が届けなければと肌身離さず持っていた。日ソ戦で、孫呉への避難行路中や難民収容所で民間の人達のも、本籍地の役場を通してお渡し出来たと思う。

私達は1945（昭20）年8月15日に、あの忌まわしい戦争にピリオドをうったのだ。多くの犠牲者を敵も味方も異国の地に放置したままだ。戦勝国ソ連もお国のために死んだ戦死者を、死んだ人間は用無しと使い捨て、放置したままだ。戦車の上に敵味方が折り重なって死んでいた。人は死ぬと土に還ると言う。敵味方同じ土に仲良く還ってくれていると思う。そして、ご遺族に骨も遺品も届かないのが戦争なのだ。

私は戦争に遭遇した一人として、戦争の悲惨残酷さを一人でも多くの人に伝えなければ、と、義務感にかられている。人間のエネルギーは地球の平和と、人類の福祉に使わなければ、と。

語り継いでほしい満州棄民

綱本 タヨネ

私は終戦を北満「鏡泊湖」で迎えました。日本が負けるとは夢にも思っていませんでした。今、戦争体験は人々の心と体から次第に薄れ風化され、忘却されようとしています。然し、遺骨の蒐集、残留孤児の問題が解決されていない以上、満州で終戦を迎え、棄民扱いされた者には「終戦」がこないのです。人知れず死んでいった同胞への供養と筆をとりました。

終戦の少し前、主人に召集令状が来て入隊し、母子3人と「鏡泊湖」から婦女子37名で、逃避行の始まりは1945（昭20）年8月9日からでした。毎日毎日の難民生活は悲惨なもので、思うだに恐ろしいこの世の地獄でした。早朝から夜にかけての逃避行は飲まず食わずで、頭に巻いた一本のタオルも重くて捨てて歩き、馬や人間の屍体が浮いている川の水に、飢えと渴きを癒されるのです。道中、黍畑でお座や、赤ちゃんを背負ったままソ連兵に強姦された

り。私は一人を背負い、一人の手を引いて、ソ連兵に銃で追われながら、疲れた足を引きずっての歩みでした。

収容所にされた開拓村に入り、一日一回の雑炊が配給され命を繋ぎました。昼も夜もソ連兵の強姦を逃れるため、若い女は丸坊主になり顔と頭に焚火の煤を塗り汚い男に変装しました。ここで一か月余り暮らしましたが、幼い子どももの犠牲者が出始めました。雪が降り、一日一回の食事も打ち切られたので、収容所を出て自活生活を始めることにしました。現地人に家具も炊事道具も盗まれ、窓ガラスも畳もない荒らされた日本人官舎に、牡丹江辺りから避難してきた、無一物で命だけを持った人達と一緒にになりました。

窓には筵を吊り、土間にはセメント袋を敷いて畳代にし、空吠を布団代わりにしましたが、寒さと飢えで泣き明かす夜がつづきました。ここでもソ連兵の強姦はひどいものでした。このような生活でも、出産する人があり、私も産婆の代用で3人も取り上げました。使う産湯もなく、祝福もなく、名前もなく、温い母乳もなく、産着もなく、そして産声もなく、太陽の光も見ず、生まれ出たこの世から次々と、はかなく消えていきました。

氷点下35度の寒さに、自活の道は茨に満ちた厳しいものでした。穴のあいた地下足袋を履き、風呂敷を被り、セメント袋を上着の下に着て、動くときカサカサと音がするのです。吹雪の町を物売りして歩くと、満人の子どもから「ヤポン、ヤポン」と小石を投げられ、叱ることも出来ずコソコソ逃げ回り、顔に雪と一緒に流れる涙は頬に冷たく凍りつくのです。汽車が着く度、駅から旅館までの荷物運びもやりました。重さが肩に食込み、凍り滑る道をヨタヨタ腰を曲げて働く姿。これが昨日まで誇り高く生きていた日本婦人の姿だったのです。

品物は、売れる日も売れない日もありました。売れたお金で、肥料用の大豆粕、雪花菜（オカラ）がバケツ一杯一円。これに岩塩を砕き粉にしたのを振り掛け、皆で分け合って食べる。粟、高粱が一日二回。米は日本に帰るまで食べることは出来ませんでした。お風呂は1年2か月入浴できず、着替えは一年半後帰国の途中ハルピン駅構内で人の脱ぎ捨てた衣類を拾って着るまで、一回も着替えも持ちませんでした。

12月に入って、寒さと飢えに加えて発疹チフスが命を狙い始めました。母親が病み、思い余って可愛い吾子を自分の手で殺し、後

自殺の母親。なんと悲しい母の愛情でしようか。生活の厳しさと、余りの環境の変化に発狂する人もいました。夏服一枚で北満国境からの難民は、凍傷に罹り死んでいきました。冷たくなった愛児を抱いて病む母。死んだ母に取り縋り泣く子。明日は満人の荷車（タチヨ）に乗せられ売られていく子。生きるために子連で満人の二号になる婦人。この頃、日本人の子どもに、女児500円、男児300円。五歳の男児は驚く高値と噂があり、私の子にも何回となく買手がつきました。

毎日毎日、恐ろしいほど、人が死んでいきました。死んだ人は裏の壕に投げ込むだけです。大きな壕も瞬く間に死体で埋まりました。私達母子も一度発疹チフスに罹りました。九死に一生を得ましたが死線を彷徨うとき、夢はいつも両親と懐かしい故郷の景色でした。暖房もない部屋で、飢えと寒さと病魔との闘いに：死ぬるものか！死ぬるものかッ！死んでたまるものか！と、燃え尽きようとする気力を掻き立て掻き立て、母子3人肩を寄せ合い、肌で暖め合って生きて来ました。

雪が解け、春が来ました。しかし難民には春は遠く、花咲く春は巡って来ませんでした。物売りも長くは続かず、生きるために農村で働くところを探しましたが、子連れは雇って貰えず、食べさせて頂くだけの条件で農家の女中になりました。朝4時から炊飯、村外れの井戸から雨の日も毎日の水汲み。濡れた衣服は着たまま体温で乾かす。日中は農作業、冬は暖を採れなかった代わりに、夏はオンドルの生活。毎夜南京虫と虱の来襲、下痢の激しい息子の野外便所通い。寝る暇ありません。

粟、高粱、玉蜀黍と生味噌の食事、子どもは栄養失調で瘦せ衰え、皺と皮だらけでお腹ばかり大きくなり、関節ばかり大きく馬の足のようになつて、歩くことを忘れた子になりました。しかし命の灯だけは消すことなく、1946（昭21）年10月末、祈り続けた祖国へ死線を越えて、引揚げる事が出来ました。婦女子合わせて37名で避難し、避難中に6名の生命が生まれましたが、無事祖国の土を踏んだのは、私達母子3人をいれて12名でした。

戦争は命と財産を根こそぎ奪うだけです。絶対にしてはなりません。今も、彼の地で死んでいった仲間の靈魂の叫びは、私の心の中へ「助けて！」と、響き轟いているのです。邦人棄民は侵略戦争本音の裏面史です。封印しないで下さい。日本が世界が平和になつてから起きた満州棄民とシベリア抑留は広島・長崎に次ぐ悲劇です。

流転の万年一等兵（遺稿）

長尾 堅造

1919（大8）年生。建築業の私は、1939（昭14）年徴集兵で満州（中国東北）愛軍（アイゲン）小興安嶺山中にある工兵隊に現役入営。隊長は、長 治幸少佐（沖繩の摩文仁で自決した第32参謀長、長 勇中将の弟さん）で、教官は、内田亀夫中尉（廟行鎮の爆弾三勇士の分隊長―当時伍長）。現在久留米市在住の川野真平中尉が中隊長。朝水（チョウスイ）の副官が和田博中尉、斉藤曹長が人事係。高藤、内藤、植松さんらは、昭和12年兵で16年春除隊。秋谷、朝倉、杉浦さんらは私たちの二年兵で下士官候補生、三好君は同年兵で下士候。川口、舘秋、岩間が一年後輩の15年兵。その頃の思い出を話します。

1941（昭16）年6月から、黄葉中佐の指揮で、歩兵、砲兵、通信兵、工兵混成で陣地構築に、私は（木匠Ⅱムージャン）として派遣され、平射砲用二門、92式M・G用、14式L・Gなどの掩体作りを担当した。兵一人に10名前後の苦力（クーリーⅡ肉体労働者）を使いました。この苦力は、1937（昭12）年以降、広島港から出動した第5師団（板垣征四郎中将）が、包頭（中国・山東省）を侵略進攻中に、畑で農作業をする中国農民を兎狩りでもする様の一網打尽拉致し、ソ満国境の陣地構築に送り働かせた。

陣地構築は、前方1メートル、横壁、天井、交通壕壁のコンクリート膜板を張る工事をしました。日本兵の監視下で働く苦力の人数は桁違いに多かった。敗戦後、この農民拉致苦力強制労働の責任で、当時この方面の第5旅団長、内田銀之助少将―後に蒙古地区の第118旅団長、中将―は中国の告発で戦争犯罪人として告発収容された。

一日の作業が終わると、苦力に二粒の阿片を渡すのです。喜びましたね。皆が吸っているわけではなく、中には自分は吸わずに貯めておいて、売る者もいました。阿片の魔力は大変なもので、阿片が切れると空っぽの木瓜（モッコ）も持てなくなるのが、阿片吸口に付着しているヤニをなめさすと、忽ち元気百倍。一コの空木瓜も持てないのが、土を一杯盛り上げた二コの木瓜を天秤に担ぐのです。驚きましたねその魔力に。麻薬漬け、阿片中毒にして、阿片を貰える喜びで苦力を一所懸命働かせたのでした。

1934（昭9）年頃より、特務機関は「対岸ソ連領ブラゴエシチェンスク付近に、強固なコンクリート製トーチカ群を配備完成さ

せた」と、築城に関する情報を関東軍司令部に報告しています。昭和9年頃は、国境守備隊は編成されておらず、北満方面は昭和11年迄、3師団が派遣されていて、次の12師団が昭和12年春引揚げ、その後に9師団が、9師団引揚げた後に1師団が駐留しています。この師団が乾岑子（カンチャーズ）島事件（昭和12年6月19日）に出動しています。これは国境守備隊創立以前の事です。

日本の進路を分けたと言われる2・26事件。1936（昭11）年2月26日で、歩兵1聯隊の11中隊と、M・G、歩兵3聯隊の2中隊が重罰を受けましたが、その後これらの関係師団が孫呉（ソング）に島流し？で送られています。昭和13年2月25日に現役は3年制へ延長され、昭和15年9月15日、勅令第580号で、各兵科の呼称が廃止され「陸軍」を冠するだけになりました。

私は、入隊一年後の昭和15年9月1日、一期の検閲終了。一選抜で陸軍一等兵に進級、兵精勳章も貰い、上等兵候補者を命じられました。これは一緒に入隊した同年兵の上位5%の成績優秀で前途洋々の誉れでした。先輩の2、3年兵は赤羽の工兵一聯隊の人達で皆さん「ベランメー」口調でまくしたてる連中でした。初年兵も入り、長尾二年兵殿と呼ばれていました。二年兵になると毎日演習、訓練をするのでなく、各勤務に、炊事・縫製・厩・軍犬・鳩など、私は酒保当番（兵士相手の日用雑貨店？）将校集会所当番など勤務していると、昭和16年6月1日付で、西溝の陣地構築に木匠として、再び阿片と引換えに苦力を使う任務になりました。

陣地構築中に関特演（昭和16年7月7日、関東軍特別大演習を行うと世界に向け発表し、大動員令で集めた大部隊をソ満国境に配備。驚いたソ連はヨーロッパのソ連軍を極東へ急遽大移動。同盟国ドイツ軍の対ソ戦に貢献した）が始まり、私は佳木斯の独立工兵第52大隊に派遣される事になりました。ここの工兵は大河渡河部隊でした。これ以来私は愛軍に二度と戻ることはなかったです。この転属が私の不運の始まりで、軍隊用語で「員数外」にされたようです。原隊なら入隊2年目で上等兵進級が保証されていたのに、いつまでたっても進級もなく佳木斯―虎林―中支安徽省―虎頭―佳木斯―ハルピンと転々と移り、兵舎には入れて貰えず、殆ど九五式八垂形天幕か幕舎、半洞窟兵舎で起居する事になりました。

忘れもしません、1943（昭18）年4月18日、連合艦隊司令長官山本五十六將軍が撃墜戦死された日です。入隊して4年になるのにまだ陸軍一等兵の私は、ハルピンに出張を命じられ、市街を

歩いていると、愛軍で同年兵であった村田幸一が和服姿で歩いているのだ。聞くと、同年兵は全員上等兵か兵長で満期除隊して、長尾なら間違いなく兵長、上手いくと伍長で満期していると思つていたと言うのです。更に私が使つていた苦力も含め、陣地完成で機密保持で全員殺したと言うのです。驚いた私は、公用外出が終わり帰隊して、直属の准尉に経緯を説明して満期除隊を直訴しました。准尉は「馬鹿を言うな、下士適と善行章をやるから辛抱せよ」これを受入れると除隊が延長されるので、あくまで満期を要求。態度がデカイと営倉に放り込まれました。

営倉は自殺防止で釦を全部もぎ取り、紐類もなくズボンで固定出来ず、両手で持ち歩く姿は不様そのもの、麦6米4の割合食事は喉を通らず、就寝以外は正座で軍人勅諭の清書。出所したら陸士54期出身の私より2歳若い田中早苗少尉に顔が変形するまで殴られ、下士適も剥奪され再び陸軍一等兵に降格されるが辛抱する内に、満期除隊命令が出て集合の奉天（瀋陽）へ向う。奉天には満州全土からの満期兵450人が集まり日本へ向け出発。一等兵は私一人。皆兵長、伍長で上等兵は一人もいず、軍隊は面白い習慣があり、階級の低い私が一番長い在籍者なので、先輩を大事にし「四年兵殿」と丁寧な態度で接しられ、私の三度の食事は上級者が世話をするなど、上膳据膳の殿様扱いで威張って帰ってきました。

赤羽の原隊に一泊、翌朝私を除き除隊。その頃私は将校室で怒鳴られていた。ずるそうな顔の少尉が「貴様、階級は何だ」「陸軍一等兵、長尾堅造であります」「馬鹿者、陸軍に四年もいて、一等兵とは何だ」「下士適任証と善行章を頂いた事があります」「何んだと！、下士適を持った一等兵がどこにいるか。貴様我輩を馬鹿にするのか！貴様一体何をしたんだ！」「何も致しておりません」「こんなやりとりが続き「貴様！本当は兵長だろう」疲れてきたので「そうですねありますか」と、将校室を出て除隊。家が都内なので一番早く帰省したのは私だと思う。お袋は「ゆつくり休んで来月からでも仕事をしたら」と、労ってくれた。昼寝をしていると、7日目に「長尾さんおめでとうございます」と、召集令状。濃厚なお袋が宮城の方角に向き正座して、「天子様、あんまりだ、息子がそんなに憎いのか」と、はらわたから絞り出るような呻き声で泣いていた。

十日前、除隊したばかりの赤羽の営門を再び入る「陸軍兵長 長尾堅造」で届けられた呪うばかりの召集令状を持参して。入隊するとなんなく緊迫感が漂っている。編成もそこそこに出発。釜山に上陸、鴨緑江を渡り、北支を横切り中支に入り、第12野戦補充工兵

隊の編成に入る。京漢作戦、洛陽攻略作戦に参加。壕の深さ7メートルに縄梯子をかけ、兵隊を登らす内1／3がやられてしまうが、工兵は壕の下で梯子を確保していて無傷。次に内蒙古の包頭へ、ここで部下が悪評高い上官と酒が原因でもつれ争い上官死亡さす。私も責任をとらされ釦も紐もちぎられて「重営倉」の処分になる。

営倉に入り一時間もしないのに「長尾出てこい」と呼びにくる。不審に思いながら出頭すると「重営倉三日を命ずる、但し平常通り勤務すべし」の命令で「黄河渡河作戦」（司令官根本博中将）の舟長が居ないので私に決り渡した兵は対岸で全滅する。その後、この野戦補充工兵12中隊は、独立混成旅団配属となり、第二次京漢作戦で河南省南鄆城、老家口、西峡などの作戦に参加。標高740メートルの山上では、食う物がなく狩猟や青大将などで命をつなぐ内、半数がマラリアに倒れる始末。

1946（昭21）年5月5日復員。建築業に励み、余暇は「私の戦歴」を完成することだと思ひます、今回はここまでです。

十七歳の志願兵

佐藤 義夫

満州国で生れ育った私は日本を知らない。周囲の満人達は大人も子供も日本人には何時もニコニコ笑顔で低姿勢なので、私は子供の頃から日本人は偉いのだと思っていた。偉い日本の大人も兵隊さんには低姿勢なので、早く兵隊になるのが夢だったので17歳で志願し、1945（昭20）年2月1日見事合格。5月22日第六国境守備隊歩兵六中隊に入隊した。「昭和生れの兵隊が来るようでは関東軍も終りだ」と言われても私は一生懸命訓練に励んだ、帝国軍人になった以上酒も煙草も遠慮するなと進められたが「女はまだ早い」の意味が分らなかった。

8月9日対岸のソ連領から攻撃戦争が始まった。班長の小林軍曹殿が「子供を死なせることは出来ん、俺から離れるな」と命令され軍曹は20日に戦死。翌日ソ連軍から負けを知らされ降伏した。

日本へ帰すとシベリアへ連行されたが、日本に家のない私は思った。翌年3月、ソ連は18歳未満は解放するから歩いて帰れと、凍った黒竜江を満州国へ徒歩で追放された。黒竜江省黒河中原街の我が家は焼失していて、父母弟妹の行方はいまだにわからない。

戦争を知らなくても

佐藤 幸子

戦後生れで戦争を知らない。両親から断片的な戦争体験はよく聞いた。その影響でアジア・太平洋戦争を忘れたくないと思っていたが、心ので「思う」という形だった。それが、ある戦争と平和に関する資料館（以下資料館）でボランティアを始めて変化していった。資料館に展示ガイドが必要だと感じて2008年、京都の金閣寺近くにある立命館国際平和ミュージアム（以下ミュージアム）でボランティアガイド養成講座を受講して、資料館のガイド養成に取り組んだ。

ミュージアムでガイド経験を積む一方、資料館でもガイドをしたことに対して、「平和運動をしている」と言われ返事に困ることがある。難しいことでも大変なことでもなく、ただ必要だと思ったことをしているだけで、そのように考えているわけではない。

ミュージアムでの話。おばあさんとお孫さんのガイドを終えると、「孫に戦争の体験を話したいと思っていました。でも話すといっても、食べものがなくいつもお腹を空かせていた、それくらいの話しかできないの。戦争の悲惨さを伝えたいのにその当時は、何がどうなっていたか分からなかったし、戦争が終わってからは、生活に追われ考えるゆとりもなかった。でもどうしても、大勢の人が亡くなった戦争を孫に伝えたくてここに来ました。私も何があって、どうしてそんなことになったのか、初めて分かったことがいくつかありました。戦争をこういう具合に伝えたかった」

このように話された。せっかくだからおばあさんがお孫さんに、体験談を交えながら館内を見学するのがいいのではと思っていたので意外だった。戦争を知らない人に、あの当時のことはなかなか理解できないだろうと言われることがあるが、おばあさんの言葉は、戦争を体験した人も戦争を知らない人も、戦争を語り継ぐ大切さを教えてくれたと思っている。

資料館でボランティアをしていたときの話。ある高校で十五年戦争について話しをする機会があった。心がけたのは、被害の大きさを数字だけで理解するのではなく、一人一人が強いられる犠牲や被害を想像してもらえようと、具体例を挙げて話しをした。その1つにミュージアムにある「ムッチャン平和像」の話を引用した。

「戦争でまっ先に犠牲になるのは、子どもや老人や体に障がいがある弱い立場の人です。これからある少女の話をしますが、もしそ

れが、私だったらと想像しながら聞いて下さい」と、話しを進めた。女の子はムッチャンといった。国民学校6年生のときに横浜で空襲に遭い、お母さんと弟は行方不明になった。大分県のおばさんの家に預けられたが結核を患っていて、一人で防空壕の中で寝ていた。大分でも空襲が始まり、人びとはムッチャンがいる防空壕に避難してきた。やがて戦争は終わったが、ムッチャンは人びとから忘れられ、一人ぼっちで防空壕の中で餓死した。生徒たちは、もし自分だったらと想像してムッチャンの悲しみやつらさや心の痛みを感じ取り、戦争をしてはいけない、世界から戦争がなくなつて平和になるようにと考えたようだ。

また資料館で小学生のガイドをする際にムッチャンの話をすることもあったし始めると児童は集中して聴きます。近づいて聴こうと前に詰め、児童の輪が小さくなる。表情はとても真剣だ。話し終わると、ため息が吐息のような息を吐き、もう少し聴きたいような、これで終わりにしたくないような、何か話したいような、そんな雰囲気になる。そこで、児童たちが感じたこと、考えたことなどを話してもらい、一緒になって考えるというスタイルだ。

自らがガイドをして、戦争を語り継ぐとは想像もしていなかったが、一つでも心に残るような話で、来館者に戦争と平和を考えるきっかけとなるガイドをしたいと思っている。

学徒動員中の戦争体験

大村 達雄

私は太平洋戦争勃発の翌年、昭和17年に旧制の熱田中学に入學しました。学校で授業を受けたのは二年生迄で、三年生からは名古屋市南区昭和町の化学工場へ工員として動員されました。生徒は各班に編成され、私は5人一組で食塩水を電気分解し塩素を発生させ炭素棒に付着しのを金具で削り取る仕事でした。

作業中空襲警報が鳴ると何時も天白川の河口付近まで避難しました。名古屋が最初に爆弾10トンも積む「超空の要塞ボーイングB29戦略爆撃機」80機による大空襲を受けたのは1944(昭和19)年12月13日の三菱発動機大幸工場でした。二回目の空襲も作業中の昼間で天白川河口まで逃げましたが、爆撃されている煙は鳴海の方角なので工場へ戻らず、天白川の堤防沿いに鳴海の我が家に向け走りしました。爆弾は我が家の近くにも10数機の爆撃機が

編隊を組み一斉に爆弾を投下するので、その轟音は物凄く今でも耳底に残っています。

我が家の裏口では大きな石の下敷きにされた男の人が血を流して倒れていました。私は親父かと驚いて確かめると近所の警防団の人でした。付近は四方八方で死傷者が大勢出て町中が騒然としていました。爆弾は近くに4発投下されていて、大きな石が爆風で我が家の裏口まで飛んで来て運悪く石の下敷きになり、近くの人ばかり20数名の犠牲者が出ました。新聞もラジオも空襲のあったことは報道しますが、被害は一切隠して知らせないので、被害に尾ひれがついて、大きく伝わっていききました。

年が明けると空襲も、昼間の爆弾で工場や大きな建物を狙うのから、真夜中に焼夷弾で民家を焼き尽くす恐ろしい空襲になり、私達は真夜中でも逃げられるように昼着ていた服のままで眠るようになり、恐怖と寝不足で神経的に参ってしまいました。5月14日は名古屋のシンボル名古屋城も焼け落ち、17日は真夜中に隣接する南区一帯に焼夷弾と照明弾が落とされ、真昼のような明るさにされ、その一発が我が家の薪炭倉庫に命中。私の家は昔から薪炭商をしており扇川の船着場に薪炭倉庫が建ててあり、当時薪炭は統制物資で倉庫にぎっしり保管されていたので大変でした。

その頃の生活燃料は今のようなガス、電熱は少なく、殆ど薪と木炭が炊事や入浴燃料であったし、夜空から地上の明かりが見えないように灯火管制で、屋外で煙草を吸うことも禁止され真っ暗でした。焼夷弾で燃やされた木炭は警防団により一旦消されたが、後からまた発火するで、二日二晩着の身着のままの徹夜で、空襲の恐怖に怯えながら発火するのを防ぐために監視しました。

敗戦の知らせは8月15日正午、工場の広場で天皇陛下の放送で聞きました。工場で働いていても本業は学生で、学校では陸軍の配属将校が軍事訓練を指導し、アメリカ軍が日本本土に上陸したのを迎え撃つ訓練をしていました。私は器用なのか射撃の腕前が他の学生よりも秀れていたもので、16日に義勇兵として豊橋の陸軍部隊へ入隊が決まっていたので、敗戦の放送を聞いてから学校へ行き、先生に言っただけで兵器庫から機関銃を家に持ち帰り入隊の準備をしました。殆どの人達は死ぬまで戦うと騒いで、徹底抗戦だと夢遊病者のようでしたが、父は静かに「負けたんだから行くなと止め」私は残念でしたが、今考えると、戦争が続いていたら私の人生は16歳で終わっていたのでした。戦争は学生も巻き込みます絶対反対です。

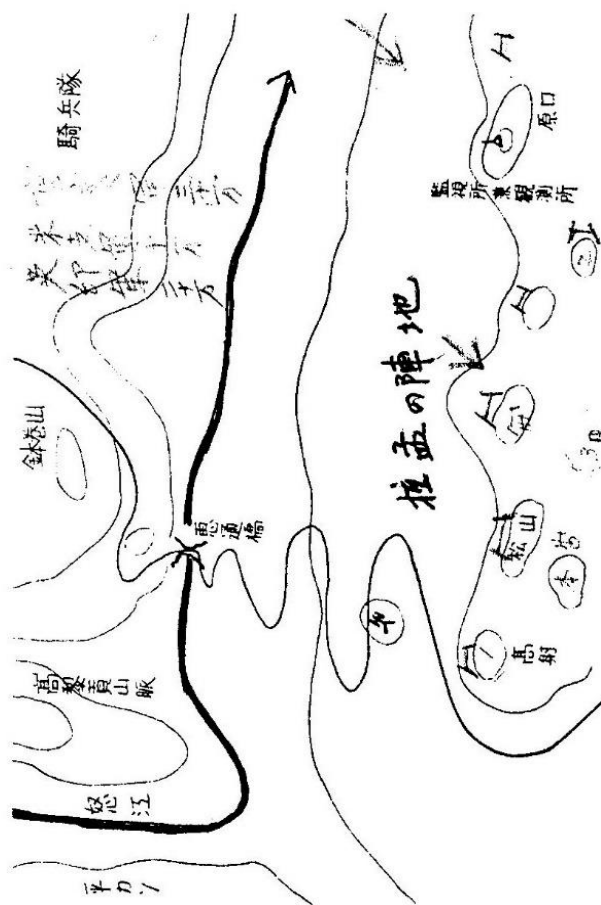
神風は吹かなかった

伊藤 万平

如何に戦争が愚かな行為であるか。……戦後65年。戦争の悲惨さも薄れていく現実の中で、確実に戦争体験者が加速度的に激減しつつある今、あの白骨街道と表現されたビルマ戦線の惨状を生抜き体験した者として、伝えたく筆をとった。

ビルマ（ミャンマー）方面軍の敗色が濃くなり始めたのは、援將ルート（アメリカなど連合国が中国軍に武器食料の支援道路）壊滅作戦の雲南省怒江右岸の高地に陣地を構築、敵の侵攻阻止のため砲兵隊を配置し、渡橋または渡河する車両や兵を攻撃していた守備隊、野砲第24連隊、第3大隊守備隊長以下1400名余が、1944（昭和19）年4月から守備に付き、米支連合の重慶軍を惠通橋で阻止せんと攻撃したが、我軍は戦闘隊でないため武器は少なく、また武器などの補給もないので、夜間攻撃に切替え敵陣地に夜襲をかけ敵を攪乱したが、敵の精鋭兵力6万と敵機の空爆攻撃に120日間耐え、遂に力尽き我軍の半数以上が戦死、残る將兵650名余中、健勝者僅か300余名を先頭に8月15日、敵陣に最後の攻撃を行い全滅玉碎した。

この証言者は該部隊より師団本部へ「玉碎」の報告を命じられた2名の下級兵士による証言であり、いみじくもこの1年後に日本は降伏した。当時私は、第5飛行師団司令部で暗号解読講習中であつたが、講習期間一か月を15日で受講終了されカンボチャの原隊に復帰。この後、ミャンマー方面の敗色とインパールの悲惨な戦場へと続き、上層部が部下を励ました『神風』は吹かなかつたのである。



何が玉砕に追いやったか

伊藤 万平

これは軍人勅諭の教えに因るものと思います。日本軍は捕虜になるのが最大の恥じと教育されていた。支那事変の時、敵陣の鉄条網で前進出来ず苦戦していたとき、3人の工兵が爆薬を詰めた鉄筒を抱え、鉄条網に飛び込み進路を開いた爆弾三勇士は軍神として祀られる。

大東亜戦争でも太平洋の島々や、雲南の二か所の玉砕は集団自決でした。また、敗戦で退却のとき精魂使い果たし、行き倒れ最後の時用にと残していた手榴弾で自爆。また小銃に足を掛けて自決した戦友を思うとき、両手を挙げて降参する敵兵との違いは、永い間培われた教育による教えだと思えます。

だから捕虜になった者はまず無かった。そのため、後方に退却中に起きた悲惨な情景が随所に見られた。：その中の一つ：ある朝のことでした。夜間の輸送作業も終えて河を見ると、何十人かの日本兵と白衣を着た十数名の看護婦さんの死体が浮かんでおりました。場所ではシタン河の河口で、潮の干満で浮遊し移動し目の前に流れ着いていたのでした。シタン河上流の激戦地だろうか、それとも沖の輸送船かもと、その痛ましさに涙を流しました。非戦闘員の看護婦さんまで自決玉砕に導いた教育に、戦争の怖さを感じます。



引揚の史実を語る 舞鶴平（たいら）棧橋

橋詰 四郎

シベリア生還者は2600万円集め、1994（平6）年5月27日に計画している舞鶴市制50周年記念事業の一つに加えて下さ
いと、祖国生還第一歩を涙で濡らした『引揚棧橋』復元をお願いし
た。舞鶴市は「棧橋は歴史の語り部。世界平和の懸け橋として未来
永劫に史実を継承する」と。生還者の申入れを受入れ実現した。
引揚第一船は1945（昭和20）年10月7日南朝鮮釜山から
ソ連からは1946（昭和21）年12月8日ナホトカから
1950（昭和25）年4月21日ソ連は送還は完了したと宣言。
驚いたシベリア生還者は「シベリアの何処に居るか教えてやる、も
う一度捕虜にせよ」と。ソ連側に強行抗議をしつづけ、再開させ。
最終船1958（昭和33）年9月7日まで引揚はつづいた。

祝 舞鶴平





記憶にない父を探し続けている娘に「父の名を書いた幟を持って」桟橋に立ちなさいとアドバイス
 <左から3人目>俺はアラチカ炭坑で貴女のお父さんを埋めてきたと老人が名乗り出た。撮影＝橋詰

引揚港 舞鶴の記録

引揚開始	1945(S20)10/07日
南 鮮	1 4, 2 2 5 人
北 鮮	2, 3 7 5 人
ソ 連	4 5 5, 9 5 2 人
中 国	1 9 1, 7 0 4 人
その他	2 7 5 人
引揚者数	6 6 4, 5 3 1 人
引揚終了	1958(S33)09/07日
引揚船就航延船数	4 2 6 隻

父の遺骨を
お迎え出来る

山本美智子

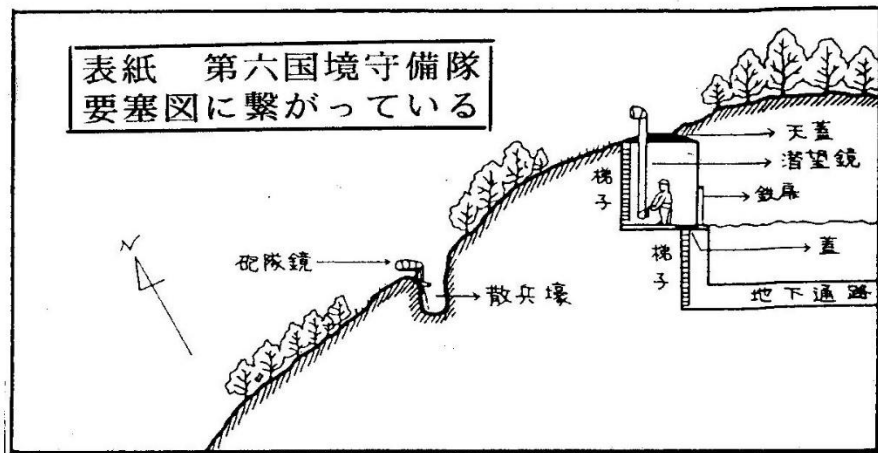
戦況が悪い、昭和19年8月に父は28歳で出征したのですが、私は1歳8か月。

その時に写した記念写真と満州の軍隊から来た軍事郵便ハガキの62通が唯一の形見であり、その事しか記憶にない父を慕っておりました。

思えば敗戦後、幼いころ母の手に引かれて舞鶴の桟橋に「父が帰る」と思い何回も訪れ、今度も駄目だったかと母はつぶやいて、泣きながら満員電車で愛知の我が家に帰った事は忘れは致しません。

春五月の桟橋復原竣工式に父の慰霊になればと参加させて頂き、偶然にも父と一緒にいたと言う方から、父の最後の状況を詳しく教えて頂き、悲しみがこみあげたが、気持ちも吹っ切れて安心しました。

これで私の戦後は終わりました。



間 4年(借用)
新 1冊(平刊)
日 2日
朝 00月14日
2008

関東軍国境要塞 32年に日本の傀儡(かいらい)国家「満州国」が誕生した後、関東軍は対ソ戦に備え34年から45年にかけて国境地帯で要塞を建設した。詳しい資料はほとんど現存しない。また、多くの中国人労働者が過酷な条件で働かされ、秘密保持のための虐殺も行われたと関係者は指摘する。

戦前、日本の旧関東軍がソ連との戦争に備えて、旧満州国と旧ソ連の国境地帯14カ所に造った巨大地下要塞群。その保護、修復作業が戦後半世紀余をへて、中国側の手で始まった。日本の侵略の傷跡を掘り起こし、人類の戦争遺産として歴史教育の生きた教材にするのがねらいだ。3千キロにおよぶ国境の戦争遺跡には観光ブームに乗って中国人が参観に訪れている。(ハルビンへ中国黒竜江省へ掘江義人)

編集後記

*2010年も早や半年過ぎ、間もなく65回目の敗戦の日が巡ってきます。

*戦後65年、憲法改正のための法律「国民投票法」が成立し、3年後の今年施行された。この法律が“世界の宝”『平和憲法』を侵す根源とならないように切に願う。

*戦後65年、6月上旬新しい内閣が誕生した。国内外が多難な折今度こそ長期政権を担ってもらいたい。

*外交・安保・経済・国債等々、難題が山積している。今一つ長々期のビジョンがあってもよいではないか。戦後100年へ向けての世界から、注目される『平和な国』づくり構想であってほしい。

戦時体験記録集(第十七集)

編集・印刷・発行

発行年月日

発行部数

戦争体験を語り継ぐ会

平成二十二年七月二十四日

百五十部